

平成28年度

文部科学省委託事業

## 「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」

スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーと協働し、  
個々の生徒のニーズに応じた支援を可能にする校内体制作り

～すべての生徒に確かな学力を保障するために～

〈 1 年 次 〉

報 告 書

平成29年3月

京都市立西京高等学校 定時制

## はじめに

近年の急激な社会情勢の変化の中で、定時制高校は、従来の勤労青少年の学習を保障する場としての役割は薄れ、不登校経験のある生徒や特別な支援を要する生徒など、多様な学びの動機や学習歴を持つ生徒に対して、学習を保障する役割が大きくなってきています。

本校定時制においても、6割近くの生徒が義務教育段階で不登校を経験しており、学習の欠落による基礎学力の不足や、目標を見出せず学習意欲の低い生徒も多く、そのような生徒一人ひとりに応じた指導を行い、成長を促してそれぞれの進路実現を目指して指導を行ってきました。

しかし、生徒たちの抱える課題は多岐にわたり、教職員だけでなく外部の専門機関との連携が必要になっています。また、生徒たちの問題行動に対応するのではなく、生徒の状況を早期にアセスメントし、予防的に適切な支援を行っていくために、教職員がスクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーと協働し、生徒情報を効果的に収集・共有し、ケース会議を開催し、プランニングし対応していくというシステムを構築していくことが必要となっています。

本事業に係る調査研究は、本校教職員が積み上げてきた数多くの支援の取り組みを、スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーという専門家の見地を加え、定時制に入学してくるすべての生徒にとって有効な支援ができるような支援体制を構築し、システム化することを目指すものであり、そのことによって、確かな学力の定着や学習意欲の向上を図り、生徒たちが将来展望を持って卒業後の進路を模索することができるようになることを大きな目標としています。

この1年間の調査研究の取り組みにより、情報収集について一定の成案に至ることができ、教職員の意識の変化にも繋がっております。さらに今後の調査研究の中で、解決に向けて取り組むべき、多くの課題を明確にすることができました。この報告について、皆様の忌憚のないご意見・ご感想をいただき今後の取り組みに生かしていきたいと考えております。

本事業を進めていくことで、個々の生徒に適切な支援を可能にする体制を確立し、すべての生徒に『確かな学力』を保障し、主体的に『社会で生きる力』を育んでいける学校となることを目指して参ります。

京都市立西京高等学校定時制 副校長 鳥羽恵美子

# 目 次

はじめに

I	学校の概要	3
1.	学校の基本情報	3
2.	学校の特色	6
3.	学校の現状と課題	7
II	調査研究の概要	8
1.	調査研究課題名	8
2.	調査研究のねらい	8
3.	調査研究の内容	8
4.	調査研究の校内組織	9
5.	調査研究計画（概略図）	9
III	調査研究の報告	10
1.	調査研究の目的および目標	10
2.	調査研究の内容および成果と課題	11
3.	調査研究の到達点	39
IV	次年度の課題	40
1.	調査研究内容	40
2.	調査研究目標	40

# I 学校の概要

## 1. 学校の基本情報

京都市立西京高等学校 定時制課程 設置学科：普通科

住所：京都市中京区西ノ京東中合町1

※ 全日制課程との併置校

### (1) 沿革

昭和10年10月	専修商業学校	( 高小卒, 4年制 )
昭和13年 4月	夜間商業学校	( " )
昭和16年 4月	京都市立第一商業学校第二本科	( " )
昭和23年 4月 1日	京都市立御池商業高等学校	(新制中学卒, 4年制)
昭和23年10月31日	京都市立西京高等学校定時制課程	( " )
昭和38年 4月 1日	京都市立西京商業高等学校定時制課程	( " )
平成15年 4月 1日	京都市立西京高等学校定時制課程	( 3年制, 4年制 )

### (2) 教職員数

職名	校長	副校長	事務長	教諭	常勤講師	養護教諭	非常勤講師	実習助手	事務職員	S C	S S W	管理用務員	夜間警備員	警備用務員	校医	歯科医	耳鼻咽喉科医	眼科医	薬剤師
人数	1	1	1	20	7	1	3	2	6	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1

※ S C : スクールカウンセラー, S S W : スクールソーシャルワーカー

### (3) 在籍生徒数 (平成28年5月1日現在)

	1 組			2 組			3 組			合 計		
	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計
1年	9	7	16	9	7	16	9	6	15	/		
2年	8	7	15	6	5	11	7	5	12	/		
3年	10	7	17	11	0	11	7	3	10	/		
4年	0	1	1	/			/			/		
合計										76	48	124

(4) 教育課程表 (平成28年度入学生用)

A コース

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年
1	国語総合 3	国語総合 2	現代文 B 2	現代文 B 2
2		現代文 B 2	日本史 B 3 地理 B	化学基礎 2
3	現代社会 3			世界史 B 3
4		数学 I 3	数学 A 3	
5	生物基礎 2			化学基礎 2
6		体育 3	コミュニケーション 英語 II 3	
7	保健 1			家庭総合 2
8		美術道 I 2	コミュニケーション 英語 I 3	
9	コミュニケーション 英語基礎 3			家庭総合 2
10		社会と情報 3	古典 A 2 ビジネス経済	
11	総合基礎 1			美術 II 2 書道 II 情報処理
12		特別活動	総合進路 1	
13	特別活動			総合探求 1
14		特別活動	特別活動	

網掛け

は、4修制を選択した場合の、第4学年での履修科目。

※ Aコース：普通科目の充実を図り、選択科目を多く配置することにより、発展的な興味や将来の進路の実現を積極的に支援するコース。



## 2. 学校の特徴

西京高校は京都市西部に位置し、京都市営地下鉄西大路御池駅前に立地する。交通の便が良いことから、地下鉄沿線である醍醐・山科方面、阪急京都線沿線である向日市・長岡京市方面、JR嵯峨野線沿線の亀岡市・南丹市方面など、京都市中心部以外にも広い地域から生徒が通っている。

市内定時制高校で唯一、長期欠席者を対象とした選抜試験を実施している。また、単位制に移行する定時制高校が多い中、学年制による教育課程を展開している。

### (1) 3年間で卒業できる教育課程

本校は、入学生全員が3年間で卒業を目指す教育課程で学習をする。「午後から始まる高校」として始業時間を少し早め、1日の授業時間は午後4時20分からの5時限を基本とし、2年生からはさらに早い午後3時30分から6時限授業を行う日もある。

### (2) 少人数によるクラス・講座編成

1クラスの人数や授業講座の人数を20名以下の少人数で編成している。教師からは生徒一人一人にきめ細かい指導ができ、生徒からは疑問点や不明点について気軽に質問ができるアットホームな雰囲気での授業が展開されている。数学や英語などの授業の一部および情報関連の授業では team teaching を実施している。

### (3) 定時制専用教室

定時制課程は全日制課程とは別に単独のエリアを有しており、ホームルーム教室をはじめ単独で使用できる教室を有している。そのため、「自分の机・自分の教室」があり、いつでも自由に学習に取り組むことができる。学習が苦手な生徒に対しての補習、進路目標に向けての補習や生徒の自主学習に積極的に活用している。

### (4) 2年生からのコース選択

本校はコース制を採用しており、2年生からAコースまたはBコースを選択する。進学から就職まで生徒の進路希望や興味関心に応じて幅広く学習をすることができる。特にBコースでは簿記や情報関係の資格取得にも取り組んでいる。

### 3. 学校の現状と課題

#### (1) 近年の定時制高校に期待される役割の変化

- \* 定時制高校は、従来の勤労青少年に対する学習の場としての役割だけでなく、不登校経験のある生徒や特別な支援を要する生徒の増加に伴い、多様な学びの動機や学習歴を有する生徒の学習保障の場として重要な役割を担うなど、その役割が大きく変化している。

#### (2) 京都市立高校における、定時制課程在籍生徒の状況

- \* 中学校在学時の不登校経験者の割合は55%～60%に達する。
- \* 発達障害を抱えていると思われる生徒の割合も15%近くを占める。
- \* その他様々な背景や「困り」を抱える生徒が増加している。
- \* 中途退学率、原級留置率はいずれも10%程度で推移しており、多様化する生徒たちのニーズにきめ細かく対応することが急務となっている。

#### (3) 西京高校定時制における支援の現状

- \* 本年度入学生のうち、生活保護家庭、児童相談所の見守り、発達障害の診断、ひとり親家庭など、「困り」を抱えた生徒が入学生の約半数を占める現状である。
- \* 個々の生徒に対して適切な支援を行うためには、生徒情報の効果的な収集、教職員とスクールカウンセラー（以下「SC」）などの専門家との情報共有、その情報に基づく支援の必要性を教職員が共通認識すること、さらには個々の生徒への対応をケース会議でプランニングし、計画的に実行していくことが求められている。現在は教育支援部を中心に支援の必要な生徒に対する方策を検討し、対応しているが、適切な支援が十分に行われているとは言い切れないのが現状である。

#### (4) 西京高校定時制が抱えている具体的課題

- \* スクールソーシャルワーカー（以下「SSW」）の専門領域である生徒の環境面における対応が不十分であること。
- \* 情報やアセスメント（見立て）が不十分であること。
- \* 具体的な支援手法に対する教職員間の知識・意識の差があること。
- \* 専門家の役割や活用方法の理解が十分でないこと。
- \* 外部資源との連携の仕方に改善の余地があること。

などが挙げられる。



## II 調査研究の概要

### 1. 調査研究課題名

スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーと協働し、  
個々の生徒のニーズに応じた支援を可能にする校内体制作り  
～すべての生徒に確かな学力を保障するために～

### 2. 調査研究のねらい

本調査研究では、一人ひとりの生徒に確かな学力を保障するため、SCやSSWと協働し、「様々な『困り』を抱えた生徒に対する支援方法の確立および校内体制の構築」をねらいとする。

具体的には、「困り」を抱えた生徒に対する、適切な時期の、適切な支援を実現するために、以下の研究を行う。

- ① SCやSSWを外部資源としてではなく、校内組織の一部として位置づける。
- ② SCとSSWが教職員と協働し、個々のニーズに応じた支援を可能とする校内体制を確立する。
- ③ 実効性のあるケース会議のシステム化、定例化を図るとともに、「支援コーディネーター」を育成する。

これらの調査研究により、中途退学率や原級留置率の低下を目指すとともに、学習意欲や確かな学力の定着・向上によって一人ひとりの生徒が自らの将来展望を意識化し、社会的に自立することを目指す。

### 3. 調査研究の内容

生徒の「困り」を早期に発見し、適切な支援を実行するためには、ケース会議の開催・進行を円滑に行うとともに、実効性を持ったケース会議の運用が必要となる。

そのため、調査研究テーマを以下の3点に分類し、SC・SSWの有用性を明らかにするとともに、教職員集団の構成員が変化しても適切な時期に適切な支援を検討することができるケース会議のシステム化をとおして、様々な「困り」を抱える生徒に対する支援方法の確立および校内体制の構築を目指す。

### (1) 具体的な支援方法の研究

情報の効果的な収集・活用やアセスメントの方法，ケース会議のシステム化に向けた会議の運用の流れについて研究する。

### (2) 支援に向けた校内体制の確立

SC・SSWの配置および教職員との協働，教育支援部を中心とした校内体制の確立，「支援コーディネーター」の養成・位置づけについて研究する。

### (3) 支援を支える知識・理解の深化

教職員の意識の向上，生徒理解・指導法の向上を図るため，研修や意識調査を実施する。

また，生徒自身の課題解決や周囲との人間関係の向上に向けて，ソーシャル・スキル・トレーニングを導入する。

## 4. 調査研究の校内組織

研究指定実行委員会

氏名	職名	校務分掌・担当教科等
鳥羽 恵美子	定時制副校長	
佐倉 隆児	教諭	教務部 教務主任 商業科
中塚 洋	教諭	生徒部 生徒指導主事 理科
宮崎 泰光	教諭	進路部 進路指導主事 公民科
前川 雅子	教諭	保健給食部 保健主事 保健体育科
東原 俊子	教諭	教育支援部 部長 家庭科
文榮 美智子	養護教諭	保健給食部
小野 潔	教諭	教育支援部 数学科

## 5. 調査研究計画（概略図）

巻末に資料として掲載

### Ⅲ 調査研究の報告

#### 1. 調査研究の目的および目標

##### (1) 目的

本調査研究は、次の三点を目的として実施した。

- \* 学校の現状と課題を改善するために、教職員と一体となって効果的・効率的な連携を図るSC・SSWを配置し、それぞれの専門性を生かして機能的な支援を実現する校内体制を構築する。
- \* こうした校内体制を確立するために、SC・SSWを校内の一員として協働する意識を持った教職員および、集団守秘義務の認識を持って教職員と共に「困り」の解消に取り組めるSC・SSWの養成を図る。
- \* また、ケース会議を円滑に進行させるため、教職員とSC・SSWの信頼関係を構築してSC・SSWを校内で有効に機能させる「支援コーディネーター」の養成を図る。

##### (2) 目標

調査研究の到達目標として、次の四点を設定した。

- \* 教職員集団の構成員が変化しても適切な時期に適切な支援を検討することができるよう、システム化されたケース会議を実施し、様々な「困り」を抱える生徒への支援方法を確立する。
- \* 西京高校定時制が抱える課題に沿ったアセスメントシートを開発し使用する。
- \* 支援のための校内体制を構築し、ケース会議への全員参加と学校全体での効果的な支援を実施する。
- \* 以下のマニュアルを作成する。
  - ・ SC・SSWとの協働および校内体制構築マニュアル
  - ・ ケース会議運営マニュアル
  - ・ 「支援コーディネーター」養成マニュアル
  - ・ 個別の支援実践事例

など

## 2. 調査研究の内容および成果と課題

### (1) 具体的な支援方法の研究

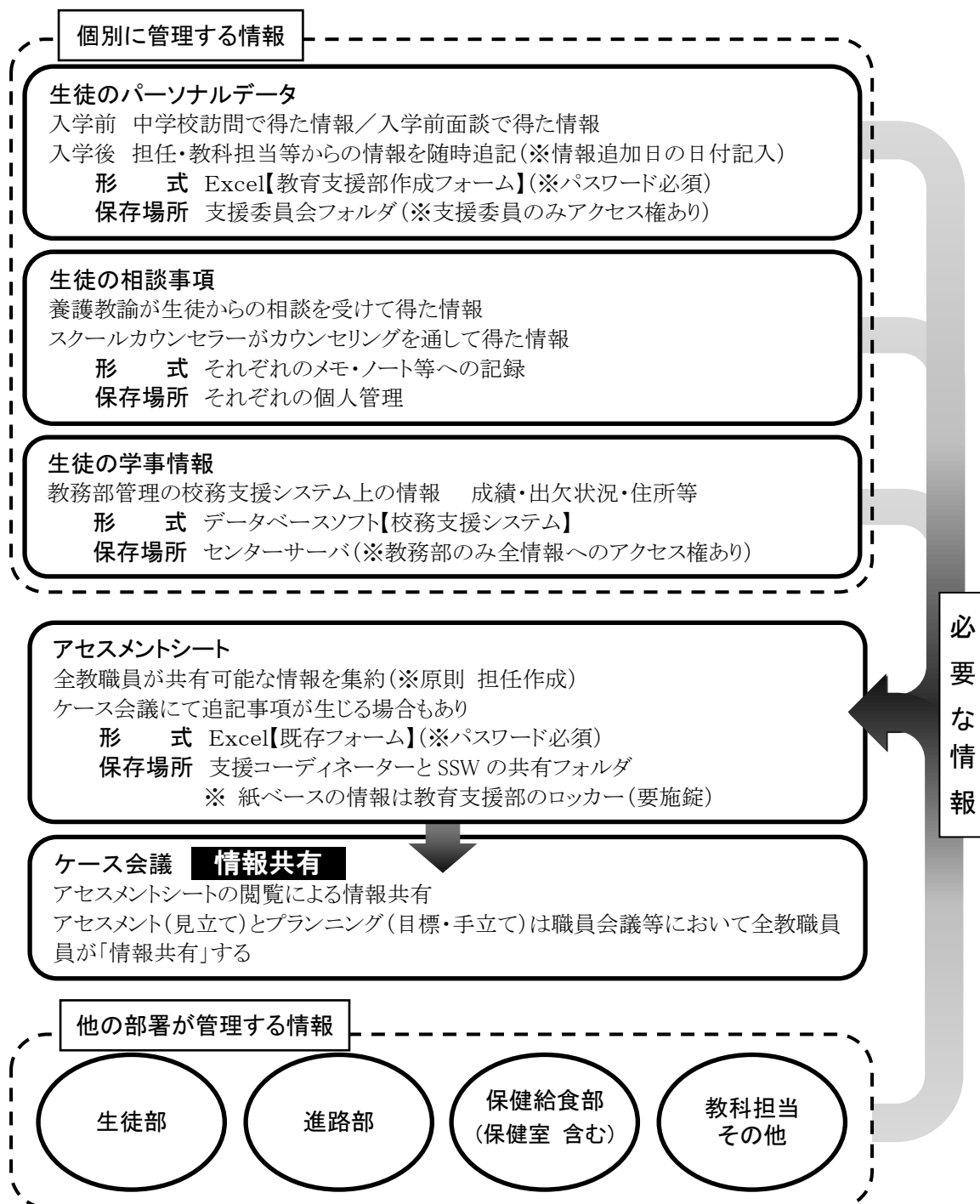
#### (1)-1 情報収集とその活用についてルールの確立

##### ◆ 内容

- \* 新入生の情報収集：新様式の情報記入用紙を作成

アセスメントシートの形で活用しやすい様式

- \* 生徒情報の管理：ルールの作成（下図）。



## ◆ 成果

### 入学予定生徒の中学校からの情報収集について

- \* 選抜試験合格者（入学予定生徒）について、「配慮すべき事項の把握」と「支援の対象となる『困り』の把握」といった情報収集を目的とし、中学校訪問を実施している。
- \* 中学校訪問時に使用する情報記録用紙の質問項目等を整えて次年度用の新様式を作成した。目的は、情報収集の精度を高めることと、ケース会議において使用するアセスメントシートとして情報を活用しやすくすることである。（資料1）

### 入学予定生徒の面談による情報収集と集約の手順について

- \* 入学予定生徒については、上記の中学校からの情報収集に加えて、入学式直前に、入学予定生徒本人と保護者および担任予定者による入学前面談と、引き続いて保健室における養護教諭および教育支援部長（次年度から「支援コーディネーター」の予定）との面談（以下「保健室面談」）を実施している。
- \* この面談における情報収集と事前の中学校からの情報収集について、情報集約の手順についても整えた。
  - ① 合格決定後の中学校訪問。
  - ② 中学校訪問で得た情報をExcelのデータベースシートに集約。
  - ③ 入学前面談で得られた新情報をExcelのデータベースシートに追記。
  - ④ 保健室面談で得られた新情報をExcelのデータベースシートに追記。
  - ⑤ 完成したExcelのデータベースシートを担当が確認。記入漏れがあれば追記。
  - ⑥ 完成したExcelのデータベースシートよりアセスメントシートを作成。

## ◆ 次年度への課題と改善の展望

### 情報の管理と活用について

- \* 情報の管理について前ページ記載のようにルールを作成したが、必要なアクセス（活用）が困難なことが想定されるようになったため改善を検討する。同時に、必要な情報に迅速にアクセスするための「インデックス機能」の構築をする。
- \* 情報活用を促進するため情報のセキュリティーを若干緩和する場合、必然的に情報管理についての教職員の意識向上も同時に図る必要がある。マニュアル作成や研修の機会が必要となる。

### 情報の収集と活用について

- \* 入学予定生徒の情報収集については上記のように一定の手順を整備した。
- \* 入学後の追加情報を共有していく手順の策定は次年度の課題である。また、支援が必要となった場合の情報活用について、「(2) 支援に向けた校内体制の確立」と連動してシステムを確立する。

## (1)-2 ケース会議の開催システムの確立

### ◆ 内容

#### ケース会議

- \* 原則として定時制副校長を含む常勤の教職員とSCおよびSSWの参加により、毎週定例で開催することを目標とした。参加者は、案件によって全教職員の場合や教科担当者等に限定する場合など変更した。
- \* 対象生徒の情報を集約して記載したアセスメントシートを用いて、参加者間の情報共有を図りながらアセスメントとプランニングを行った。

#### 支援委員会

- \* ケース会議に先立って、その事前調整の役割を担う会議。毎週定例で開催した。
- \* 構成員は定時制副校長，教育支援部3名，保健主事，養護教諭，SC，SSWの計8名。
- \* ここで、対策の検討や情報の共有が必要と判断した生徒についてケース会議の開催を決定した。

### ◆ 成果

#### ケース会議の開催について

- \* 教職員が実際にケース会議を体験したことが、ケース会議のあり方や期待できる効果の理解につながった。また、生徒支援を個々の教職員が個別に行うだけではなく、学校として行う経験にもなった。
- \* 一方で「上手くいかなかった経験」もあり、そこからケース会議の開催システムの課題を認識できた。
  - ① 支援委員会が開催を要請したケース会議の目的が、参加した教職員に共感してもらえない案件（優先順位のつけ方，HR担任との十分な吟味・調整の不足，参加している教職員の積極的なアセスメントやプランニング不足 など）があった。
  - ② 支援委員会と他の教職員との意識の乖離が顕著になり、ケース会議に対する“不信感”に近い感情が生じた。
- \* ケース会議を通しての支援は、従来の教職員の「生徒指導」を否定するものではなく、新しい職種（SSW）の知見を加え、チームで対処することで指導内容の幅が広がるのが目標であったが、新しい取組への共通理解を深めることができなかった。
- \* 本年度のように、事前の調整会議（支援委員会）を経てケース会議の開催につなげるシステムそのものに事案に対する即応性や関係者間の意思疎通等の問題があると明らかになった。ケース会議は、よりコンパクトで機動的な形で意思決定を行うことが基本であるとの結論を得た。この場合、その中心となる「支援コーディネーター」の働きが重要であるとの認識を深めることができた。

## ケース会議を通じた支援のあり方について

- \* 緊急のケース会議では生徒への適切な対応がとれたという経験もあった。必ずしも大人数での定例会議が有効な場合ばかりではなく、アセスメントとプランニングというプロセスが踏襲されていれば、その形態は多様であるべきと認識できた。

### ◆ 次年度への課題と改善の展望

#### ケース会議の開催について

- \* ケース会議開催前には支援委員会で調整するという前提を廃止する。支援委員会そのものは全般的な生徒支援策の検討等をする組織として継続する。
- \* 生徒の「困り」についての情報が「支援コーディネーター」に集まるようにし、「支援コーディネーター」を中心として会議を開く形を確立する。

#### ケース会議の形式について

- \* ケース会議の形についての再定義が必要である。今年度のように定例化を目指したもののだけではなく、短時間で機動的な会議のあり方を作る必要がある。「支援コーディネーター」、SC、SSW、関係教職員（担任、教科担当等）が集まって相談するような形の会議もケース会議として想定する。
- \* ケース会議の結果のみならず、事後の経過報告等を継続的に丁寧に行うことが、チームで取り組む支援への理解を深める方策の一つになると考える。
- \* 年度当初は、新入生を中心として多くの生徒のケース会議が必要となる。必要な会議を適切に開く方法論（日程確保、SC・SSW同席会議の対象にする判断等）の確立が必要となる。
- \* 年度当初を過ぎてからは、情報を適宜把握し、会議を適切に開くことで、必要な支援を行えるシステムの確立が必要。

### (1)-3 ケース会議の事例（「困り」の内容、アセスメントとプランニング）蓄積と検証

#### ◆ 内容

- \* 支援委員会は年間を通して40回近く開催し、30名余りの生徒を対象として話し合いを持った。
- \* その対象生徒の中から、支援委員会で必要と判断して開催したケース会議は年間を通して10回であった。対象とした生徒は9名。
  - ① 5月10日（火） 生徒Aの対応検討（情報収集）
  - ② 5月19日（木） 生徒Aの対応検討（第1回）
  - ③ 5月26日（木） 生徒Bの対応検討（第1回）
  - ④ 6月9日（木） 生徒Cの対応検討（第1回）
  - ⑤ 6月16日（木） 生徒Dの対応検討（第1回）

- ⑥ 6月23日(木) 生徒Aの対応検討(継続 第1回)  
生徒Eの対応検討(第1回)
- ⑦ 6月30日(木) 生徒Bの対応検討(継続 第1回)
- ⑧ 8月2日(木) 生徒Fの対応検討(第1回)  
生徒Gの対応検討(第1回)
- ⑨ 9月15日(木) 生徒Cの対応検討 6月9日とは異なる理由(第1回)
- ⑩ 12月1日(木) 生徒Hの対応検討(第1回)  
生徒Iの対応検討(第1回)

※ 生徒Aについては継続会議を含めて3回の会議で対象。

※ 生徒Bについては継続会議を含めて2回の会議で対象。

※ 生徒Cについては異なる理由で2回の会議で対象。

- \* ケース会議における事例の蓄積を通して、どのような「困り」や生徒の状況がケース会議の対象となるのかを検証した。

#### ◆ 成果

##### 事例の蓄積について

- \* 現在直面している「困り」についての会議以外に、次年度の進路選択・進路決定に向けた課題のある生徒についてもケース会議を開催した。その有用性も確認できた。

##### 事例の検証について

- \* ケース会議を開いて一定の成果を上げた事例からは、担任団、生徒部などの従来の枠を超えて生徒の支援のあり方を検討し、共有する有益な体験になった。一方で、情報の不足等からプランニングの具体化まで至らない場合もあったが、情報収集の重要性を確認する経験となった。
- \* 今年度の事例の検証としては
  - ① 授業に出にくい、欠席が多いなどの事例はケース会議に取り上げることで一定の効果があったと評価できる。ただし、その原因によっては十分なプランニングに至れない場合もあった。
  - ② 家庭状況から外部機関との連携を要した事例はケース会議の対象として適切であった。また、関係者のみの少人数での開催が効果的であった。
  - ③ 卒業後の進路選択に関して検討した事例では、情報交流・共有を行う中で支援の必要性の有無や具体的な対応を考えられて有効であった。
  - ④ 授業に出席していても学習に参加できない事例については、ケース会議開催の対象とすることに抵抗感を持たれる状況であった。  
という状況である。
- \* 良い評価を下せる結果につながっている事例は、保護者がSCやSSWと面談をしたりして、保護者との関係を深く持てた場合に多かった。このことは、今後の保護者との連携などに対して課題を示してくれた。



#### ◆ 次年度への課題と改善への展望

- \* 毎週定例でケース会議を開くことを目標に始めたが、意思疎通の不足から、担任の協力体制を作ることが困難となり、経験を蓄積することができなくなっていった。
- \* この経験を踏まえて、上記の「(1)-2 ケース会議の開催システムの確立」の改善に連動して次年度は「支援コーディネーター」を中心として開くケース会議の事例蓄積を重ねる。また、会議を開くことが目的にならぬよう留意しながら、必要な案件については全教職員参加のもとでの会議も重ねていく。

#### (1)- 4 生徒の自己理解を進める取組

##### ◆ 内容

- \* 本校では、生徒の自己理解を目的として、入学直後に職業レディネス・テストを、卒業年次に厚生労働省編一般職業適性検査を実施している。その有用性の再確認と実施時期の再検討を行った。
- \* また、同様に生徒の自己理解を進める検査として他に適切なものがないか検討を行った。

##### ◆ 成果

- \* 現在実施している2種類の検査については、分析等をさらに深めることでより活用の幅が広がるものとして、引き続き実施するとの結論を得た。ただし、その実施時期については、職業レディネス・テストを入学直後よりも1年次の中盤または2年次に実施する方が適切ではないかと検討した。
- \* 来年度の1年生については入学直後に、生徒自身が自己理解を進める手立ての一つとして「K J Qワークブック」を試行することとした。
- \* 入学前に学校独自のアンケートを配付し、回答を分析して入学後の支援等に役立てることにした。

#### ◆ 次年度への課題と改善への展望

- \* 次年度については、「K J Qワークブック」の試行を決めたが、他の検討事項についての結論を得るところまではいたらなかった。引き続き検討を重ね、職業レディネス・テストの実施時期を決定したい。

#### (2) 支援に向けた校内体制の確立

##### (2)- 1 スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーとの連携・協働の体制確立

## ◆ 内容

- \* 支援委員会・ケース会議を通して、連携・協働を図った。
- \* SCは週2回（月曜日と木曜日）来校。生徒のカウンセリング、保護者のカウンセリングを中心とした活動に加えて、支援委員会・ケース会議における生徒のアセスメント等にも協力を得た。
- \* SSWは週1回（木曜日）来校。支援委員会・ケース会議において生徒のアセスメントとプランニングの中心としての役割を担当する他に、外部機関との連携または紹介が必要なケースについて、情報の提供や連絡調整役としても活動を依頼。必要な場合については、生徒や保護者との面談も実施した。
- \* SCとSSWは週に1回、木曜日に同日勤務となったことにより、ひとつのケースに2人が協力して関わる場面を多く持つことができた。
- \* 京都市のスクールカウンセラー・スーパーヴァイザー、スクールソーシャルワーカー・スーパーヴァイザーとも連携を図った。
  - ① SC・SSWへの助言。
  - ② 7月7日（木）、11月10日（木）、2月9日（木）の計3回の指導・助言会議において調査研究への助言。
  - ③ 教職員研究会の講師を担当。
  - ④ ケース会議の参観と助言。

## ◆ 成果

- \* SCやSSWの専門的意見に接する中で、教職員の生徒に対する見方や意識に「できないものは仕方がない」から「なぜできないのか、できるようにする方法はないのか」へと変化がみられた。
- \* 担任等からの指導とSCによるカウンセリングという二面からの関わりにより、生徒の「困り」の軽減・解消に取り組んでいくというSCとの連携の意識は教職員間にできている。
- \* SSWについては、知識としてその有用性を認めていても実際の体験がないと実感は伴わないのが現実であった。
- \* SSWと直接関わった教職員は実感を伴って有用性が認識された。具体的には、外部機関とのつなぎをしてもらった場合だけではなく、生徒・保護者の選択肢として提示する新たな外部機関の開拓や進路変更する生徒の学校選択の支援、必要な場合の保護者との面談など、教職員の支援を補完してもらうことが、SSWの存在を肯定的にとらえる機会となった。
- \* 生徒のアセスメントやプランニングは、ケース会議という形はとらずとも、従来から担任団、生徒部などの単位で行われていた。しかし、SCとSSWが加わることでアセスメントに異なる視点が変わり、精度を上げることができた。

- \* SCとSSWが同一日に勤務をして協働するという体制からは、お互いの専門性を生かして面接場面に同席してもらったり、両者間でアセスメントやプランニングについて密に検討を行ったりすることができ、相乗効果が見られた。SC・SSWとの協働という観点で研究を進めることとしていたが、実際にはSCとSSW間の協働も実現できた。
- \* ケース会議の開催システム確立を研究テーマのひとつとしていることから、手順を踏まえて会議を開き、生徒の支援につなげるという「形」に固執し過ぎたことが今年度の協働があまり進まなかった一因である。しかし、実際には教職員のSSWについての認識が深まるにつれ、担任等がSSWに直接相談して対応を考えるという場面が増えていった。このような事例は次年度の研究につながる成果であるといえる。
- \* 上記のように、担任等がSSWやSCと直接相談する事例が出てきたことが、「支援コーディネーター」を中心としたケース会議開催を次年度の課題にすることに繋がる成果であった。
- \* 今年度は、SC及びSSWの各コーディネーターを置いたが、ケース会議の開催などの生徒支援について総合的にコーディネートするために、来年度は「支援コーディネーター」がその役割を担うこととした。

#### ◆ 次年度への課題と改善への展望

- \* 教職員アンケートの結果などからSCやSSWに対する期待値は非常に高いが、実際に協働できているという認識は低かった。
- \* SCとSSWの役割を十分策定しきれていない場面もあった。チームを形成して生徒の支援にあたる時に、役割分担や認識の事前すり合わせなどを十分に行うことが重要である。支援方針や役割分担の決定方法を確定するために、事例と経験をさらに蓄積することが必要である。
- \* 形式張った協働ではなく、SCやSSWともっと日常的に話ができる環境作りの必要もある。毎日勤務していなくとも、チームとして働いていくには、職員室の配置のような物理的な問題改善の工夫を講じながら、協働の事例を蓄積し、経験を蓄積していくことが重要である。
- \* 外部機関との連携については、個別の事例ごとにSSWの仲介を得ながら行ったが、恒常的な連携の形は作れていない。常に外部機関と連携ができている状況を作ることを目指す。

### (3) 支援を支える知識・理解の深化

#### (3)-1 ケース会議を通じた教職員の知識・認識の深化と意識の変革

◆ 内容

- \* 5月以降、10回のケース会議を開催。
- \* 実際のケース会議の体験を通して、ケース会議の形態・進行、集団守秘義務について知識を深める。
- \* 教育支援部の司会進行のもと、参加者が意見を出し合いアセスメントとプランニングを行った。経験を重ねながら、出された意見等をホワイトボードに書きだしながら参加者の情報共有を図るなど、進行に改善を加えていった。

◆ 成果

- \* 実際の事例を通して、「授業に出にくかった生徒が何とか出られるようになった」など、学校としての統一した対応が有用であることを確認できた。
- \* アセスメントやプランニングに不備があると、かえってケース会議を通した統一した対応が教職員個々の考え方と異なる場合に不協和音が生じる場合があることを経験できた。

◆ 次年度への課題と改善への展望

- \* 必要なケース会議は有効であるという認識が教職員間に定着することを目標とする。
- \* その実現のためには、事例の蓄積が引き続き必要である。

(3)-2 研修を通した教職員の知識・認識の深化と意識の変革

◆ 内容

- \* 4月以降、校内で開催した研修会は10回。校外の研修会等への参加は2回。

平成28年

① 4月28日（木） 教職員研修会

「生徒を理解するために」

講師：三木 泉 氏 本校スクールソーシャルワーカー(SSW)

内容：SSWの役割およびアセスメントシートとケース会議についての理解を深める。

② 7月6日（水） 教職員研修会

「情報管理について」 実行委員会より

内容：情報の管理ルールを確認

③ 7月21日（木） 教職員研修会

「気になる生徒についての見立てと対応 ～生徒を語る共通の言葉を求めて～」

講師：阿部 昇 氏 博士（臨床教育学）・臨床心理士  
京都市スクールカウンセラー スーパーヴァイザー  
兵庫県/宮城県緊急派遣スクールカウンセラー

内容：授業を中心とした学校生活の中で、気になる生徒についてその特性を正しく理解しどのように対応すればいいのかを学ぶことによって指導力の向上を図る。

④ 8月25日（木） 教職員研修会

「ソーシャル・スキル・トレーニングの  
実践と、今後の活用について」

講師：十河 博子 氏

本校スクールカウンセラー(SC)

内容：ソーシャル・スキル・トレーニング(SST)について、実践報告やSSTの体験を交えながら理解を深め、今後の活用についての知識を得る。



⑤ 8月29日（月） 教職員研修会

「アセスメントシートを使った生徒理解」

講師：三木 泉 氏 本校SSW

内容：アセスメントシート作成のポイントを学び、実際に作成を体験する。



⑥ 10月13日（木） 教職員研修会

「先進校視察報告と意識調査アンケート（第1回）の分析」

講師：本校教員

内容：7月に視察した学校についての報告および本調査研究の検証のために実施した生徒・保護者・教職員の意識調査アンケートの結果分析。

- ⑦ 11月6日（日） 校外研修会・講演会等参加  
「第17回 不登校フォーラム 登校ごろのたすきをつなぐ  
～子どもの発達に沿った支援～」  
内容：表題のパネルディスカッションと分科会（「学校での心理・福祉の連携  
による新たな支援を目指して」）。
- ⑧ 12月7日（水） 校外研修会・講演会等参加  
「平成28年度文部科学省委託事業『高等学校における  
個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育』研究成果報告会」  
報告：京都府立田辺高等学校  
目的：文科省委託事業の成果報告を聞き、本校の今後の取組に活かす。
- ⑨ 12月21日（水） 教職員研修会  
「職業相談におけるアセスメントの活用について」  
講師：内藤 太郎 氏 京都新卒応援ハローワーク 上席職業指導官  
内容：職業レディネス・テストおよび厚生労働省編一般職業適性検査につ  
いて活用方法などの理解を深める。

平成29年

- ⑩ 1月12日（木） 教職員研修会  
「京都若者サポートステーションとは」  
講師：竹久 輝頭 氏 公益財団法人 京都ユースサービス協会  
京都若者サポートステーション  
総括コーディネーター/チーフユースワーカー  
「児童相談所について」  
講師：三木 泉 氏 本校SSW  
内容：言葉の上では「外部機関に繋げる」というようによく使う「外部機関」。知ってい  
るようで 知らないことも多いこの「外部機関」について理解を深める。
- ⑪ 2月2日（木） 教職員研修会  
スクールカウンセラー事例報告  
「本校におけるチーム支援の実践 ― 保護者の継続面接から」  
講師：十河 博子 氏 本校SC  
内容：本年度のカウンセリング事例の中から一例をあげて、時系列にした  
がって状況の変化等を報告。カウンセリングにともなう変化の様子を  
通してその有用性を認識する。
- ⑫ 3月9日（木） 教職員研修会  
「先進校視察報告と意識調査アンケート（第2回）の分析」

講師：本校教員

内容：11月および12月に視察した学校についての報告。生徒・保護者・教職員の意識調査 アンケート（第2回）の結果分析，および第1回と第2回のアンケート結果より研究に対する評価分析。

#### ◆ 成果

- \* 教職員の知識や意識は，多くの研修を通して向上している。
- \* 本年度から加わってもらっているSSWに，役割そのものの研修会はもとより，アセスメントシート作成の研修や児童相談所についての研修において講師を務めてもらい，知識と理解が深まった。
- \* SCの役割については，単に「生徒の話を聞いてもらい悩み事の解決に協力してもらえ」という従来のSCの印象にとどまらず，SSTや保護者との係わりなどより広く支援を受けられるとの認識が，研修会や今年度の事例報告などを通して高まった。
- \* 支援のあり方や支援を必要としている生徒の見方，捉え方など研修の前後では対応の仕方に変化がみられるケースもあった。
- \* 外部機関とのつながりを取ることへの意識，そのための手立てなど認識の深まりに伴い，緊急でケース会議を開いて対応を行った事例もあった。

#### ◆ 次年度への課題と改善への展望

- \* 知識・認識の深化も意識の変革も「頭の中では分かっている」で終わってしまいがちである。生徒への支援を実際に体験できることが，さらなる向上につながると考える。
- \* 生徒の特性とその対応についての知識を高めるための研修がさらに必要であると考ええる。勉強に向かえない生徒の「困り」を知り，授業の改善に結びつくような内容について研修をすることは，教職員にとってその成果を実感できるものになると期待する。

### (3)-3 先進校視察による教職員の知識・認識の深化

#### ◆ 内容

- \* 文部科学省から調査研究指定を受けている学校を中心に他県の高校を8校訪問。
- \* 訪問した教職員の知識・認識の深化だけでなく，校内での研修会にて報告を行いその情報の共有を図った。

平成28年

① 7月11日（月） 徳島県立みなと高等学園

目的：具体的な支援のあり方 高等学校卒業資格を与える場合の指導方法・評価基準等

概要：発達障害のある生徒を対象として，社会的，職業的自立に向けた教育

を行う特別支援学校。平成24年4月開校。高等部のみを設置し、商業ビジネス科、情報デザイン科、生産サービス科、流通システム科の4学科を開設。

② 7月27日（水） 徳島県立中央高等学校

目的：具体的な支援のあり方 文科省指定の研究事業について 等

概要：定時制課程夜間部・昼間部と通信制課程の併置校。

平成27年度から平成29年度まで、文部科学省より研究指定事業「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」の拠点校として、

生徒の未来を「つなぐ」推進プロジェクト

～徳島版 定時制・通信制課程 支援・相談体制の構築～

に取り組まれている。

③ 11月29日（火） 近江兄弟社高等学校

目的：具体的な支援のあり方 SC・SSWとの協働について 等

概要：普通科単位制課程を訪問。不登校の生徒たちに特化した教育活動を展開している。支援については、常勤のSSWがSCコーディネーターを務めており、4名の非常勤SCの中から生徒にあったSCの選定をしている。SSWの働きにより、SCは心理的ケアの役割に専念できている。

④ 12月7日（水） 静岡県立静岡中央高等学校

目的：具体的な支援のあり方 文科省指定の研究事業について 等

概要：単位制による定時制課程と単位制による通信課程の併置校。

平成27年度から平成29年度まで、文部科学省より研究指定事業「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」に

単位制の定時制高等学校におけるソーシャルワーカー支援体制の構築 ～単位制・定時制高等学校における生徒の社会的包摂～

を調査研究課題名として取り組まれている。

⑤ 12月8日（木） 神奈川県立横浜修悠館高等学校

目的：具体的な支援のあり方 文科省指定の研究事業について 等

概要：単位制による通信制課程のみの大規模単独校。

平成27年度から平成29年度まで、文部科学省より研究指定事業「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」に

定時制・通信制課程における支援相談体制の構築

- 外部機関とのネットワークづくりや重層的支援の充実を通して -

を調査研究課題名として取り組まれている。



⑥ 12月8日（木） 神奈川県立厚木清南高等学校

目的：具体的な支援のあり方 文科省指定の研究事業について 等

概要：全日制・定時制・通信制の三課程併置校。

平成27年度から平成29年度まで、文部科学省より研究指定事業「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」に

定時制・通信制課程における支援相談体制の構築

- 外部機関とのネットワークづくりや重層的支援の充実を通して -  
を調査研究課題名として取り組まれている。

平成29年

⑦ 2月23日（木） 長崎県立佐世保中央高等学校

目的：具体的な支援のあり方 文科省指定の研究事業について 等

概要：単位制による、定時制課程夜間部・昼間部および通信制課程の併置校。

平成26年度から平成28年度まで、文部科学省より研究指定事業「高等学校における個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育」に

インクルーシブ教育システム ～合理的配慮～

を調査研究課題名として取り組まれている。

⑧ 2月24日（金） 佐賀県立唐津商業高等学校

目的：具体的な支援のあり方 等

概要：全日制課程と単位制による定時制課程の併置校。

佐賀県立の公立高校が導入しているタブレットを定時制でも導入している（費用は県からの補助有）。

◆ 成果

- \* 他校の取組は本校の取組にも大いに参考となるところが多数あり、研究の方向性や進め方にも有益であった。
- \* S S Wのあり方ひとつをとっても、本校との勤務日数の違いなどもあるがS Cコーディネーターや支援コーディネーターとして活動されているなど、参考にできることは多かった。

◆ 次年度への課題と改善への展望

- \* 成果に挙げたように有益なことが多数あるが、学校の持つ事情の違いにより本校でそのまま実践することは困難な取組も多い。それらを見極めて、参考にできることは取り入れていきたい。

#### (4) 意識調査アンケートによる検証

本研究を進めるに当たり、教職員には生徒支援やSC・SSWに対する意識、生徒・保護者には学習や学校生活に対する意識を把握するため、意識調査アンケートを実施した。

各アンケートとも年度初めと年度末での変化を計るため、全く同じ内容で2回実施した。

なお、アンケートの全集計結果については、巻末に掲載した。(資料2)

##### (4)-1 教職員対象

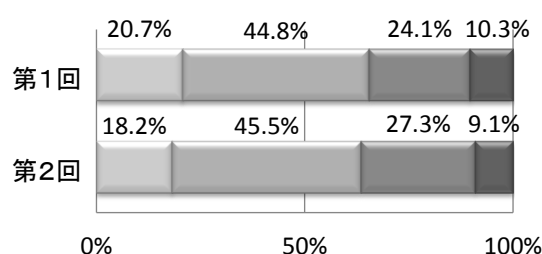
対象：定時制教職員（副校長，教諭，常勤講師，実習助手，養護教諭 計32名）

実施日：第1回 平成28年5月18日 第2回 平成29年2月15日

回収数：第1回 29名 第2回 22名

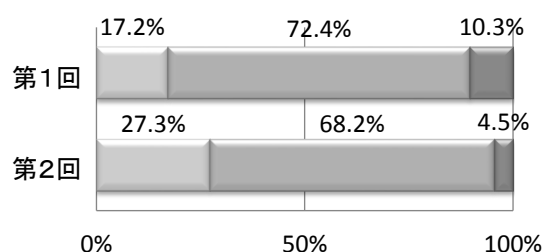
##### 設問1. 支援教育を推進しようという教職員の意識は高い。

\* 6割以上が肯定的意見であるが、第2回でも大きな変化がない。学校全体としての支援への意識の向上が見られない。



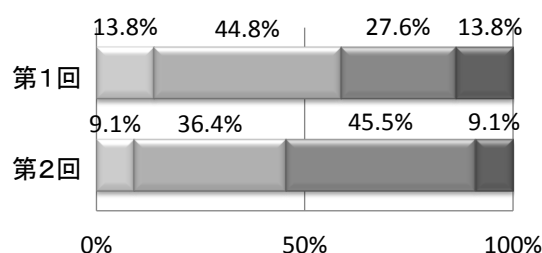
##### 設問2. 教職員に対して支援教育に関する理解啓発が進められている。

\* 肯定的意見が大多数である。年間10回の校内研修により、支援教育に関する理解啓発が進められた。



##### 設問3. 支援を必要とする生徒への対応に関して学校全体の共通理解を図ることができている。

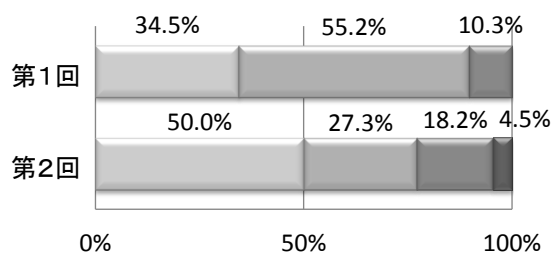
\* 否定的意見が第1回に4割以上、第2回は過半数を超えている。具体的に生徒に対する理解か、対応に関することか、それ以外の内容かについて検証し、共通理解を図る必要がある。



強く思う
  そう思う
  あまりそう思わない
  そう思わない

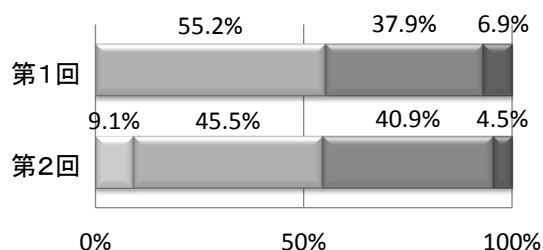
設問4. 生徒を支援することは、保護者支援にもつながると思う。

\* 肯定的意見が多い。第2回に肯定的意見は減少しながらも、強い肯定意見が増加している。実際に保護者と対応している教員が、強く肯定感を持ったのではないか。



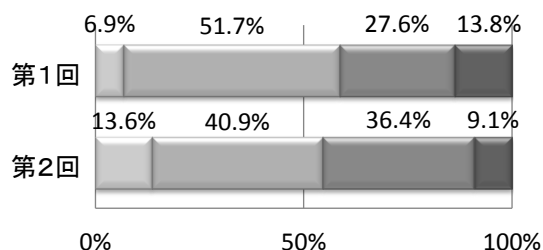
設問5. 学校で行っている支援は、生徒の教育的ニーズに応えられている。

\* どちらも強い肯定意見が少なく、肯定的意見と否定的意見が拮抗している。まだ、ニーズに応じた的確な支援ができているとは言い難い。



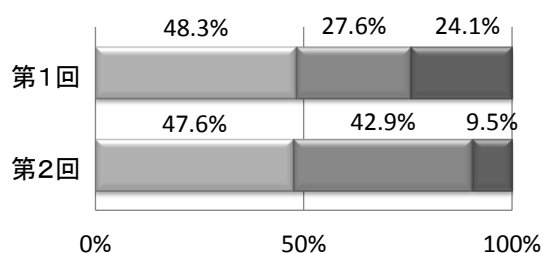
設問6. 生徒の情報は適切に共有されている。

\* 2回とも4割以上の否定的意見がある。情報は適切に共有されているとは言い難い状況である。



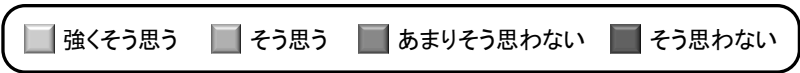
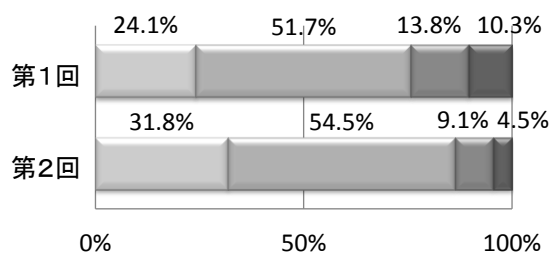
設問7. 収集された情報は活用しやすい形で整理して保存されている。

\* 設問6以上に否定的意見が多く、過半数に達している。情報を活用しやすい形で整理・保存する方法の検討が急務である。



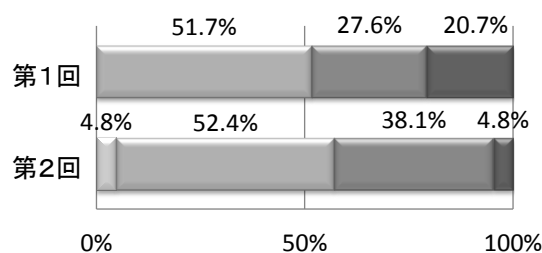
設問8. 情報の秘密保持は適切になされている。

\* 肯定的意見が多い。秘密保持が適切にされていると考えられる。



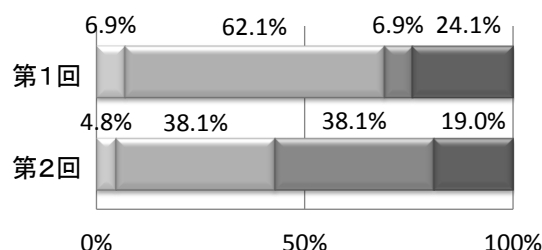
設問9. 情報を適切に活用し、必要な生徒の  
アセスメントができています。

- \* 意見が拮抗している。第2回にやや肯定的意見が増えている。少しずつではあるがアセスメントができていないのではないか。



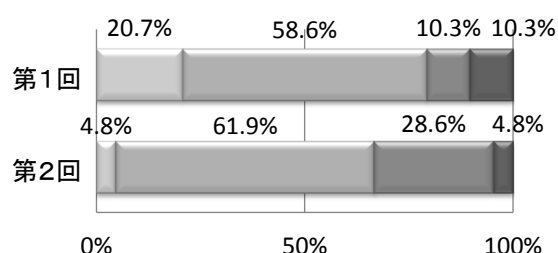
設問10. アセスメントシートは情報の的確な共有と問題の正確な把握に役立っている。

- \* 肯定的意見が第2回に大幅に減少している。アセスメントシートに対して当初期待感が大きかったが、役に立ったと感じる事例が少なかったからではないか。



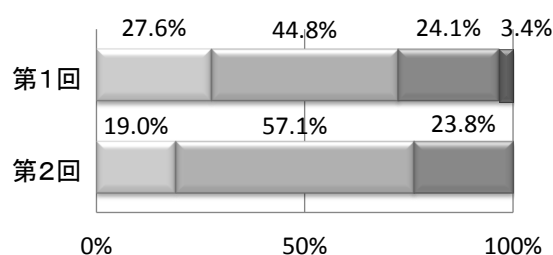
設問11. ケース会議は生徒の指導に効果的である。

- \* 肯定的意見が第2回に大幅に減少している。ケース会議に対しても当初期待感が大きかったが、2学期以降会議も減り、否定的意見が増えたものと考えられる。



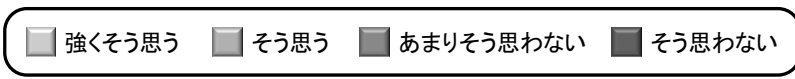
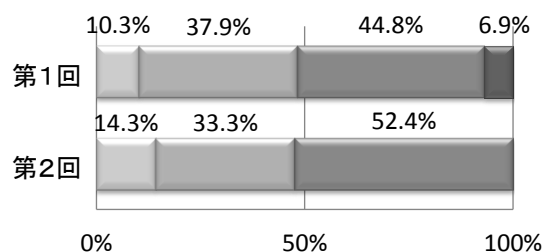
設問12. 授業をするうえで、生徒が抱える事情（学力不振、LD等）に伴って生じる負担感がある。

- \* 授業をする上での負担感が大きいことがうかがえる。ただ、負担感があっても後で見られるように、達成感が持てる教員が多いことが救いである。



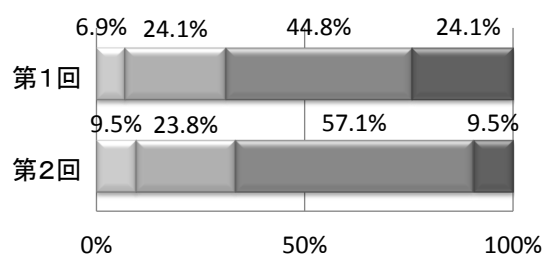
設問13. 保護者との対応が負担となる場合がある。

- \* 授業での負担に比べ、保護者への対応の負担感は少ない。保護者との間に一定の関係が構築されているものと思われる。



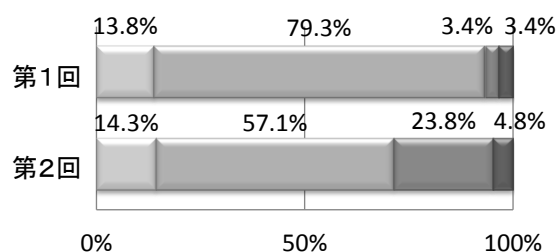
設問 14. 外部の機関（児童相談所等）との関わりが負担となる場合がある。

\* 生徒，保護者以上に負担感は少ない。ただこれは，負担に感じるほど外部機関との関わりが持っていないことの裏返しではないだろうか。



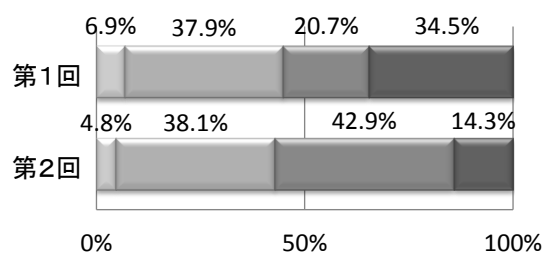
設問 15. 授業では，負担に感じることもあったとしても，授業で達成感を持てる場合もある。

\* 多くの教員が達成感を感じているが，第2回には減少している。支援したが学校を続けることができなかつた生徒もおり，その事実が達成感を押し下げたのではないか。



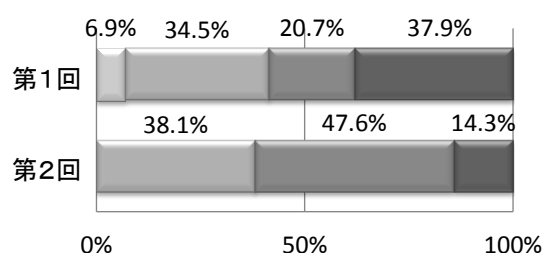
設問 16. SC・SSWと教職員の間で生徒の情報を適切に共有できている。

\* 強い否定意見は減ったものの，否定的意見が6割近くに達している。個々の教員がSC・SSWと接する機会がまだまだ足りないのではないか。



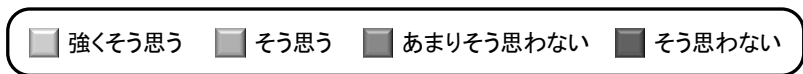
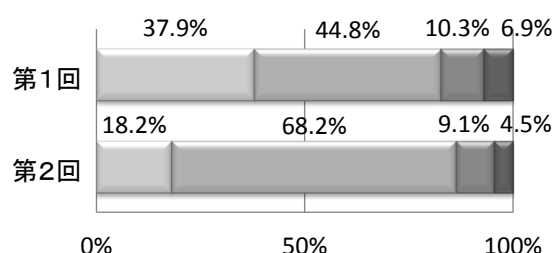
設問 17. SC・SSWと協働できている。

\* 協働に関しては情報共有以上に否定的意見が多い。次の設問でSC・SSWに対する期待が大きいことがうかがえるため，ケース会議や個々の事例でSC・SSWとの協働を積み重ねていく必要がある。



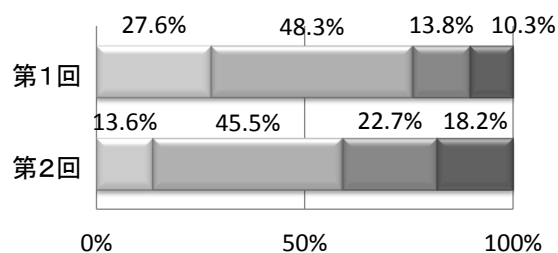
設問 18. SC・SSWの存在は，支援教育の充実に役立つ。

\* 上記2つの設問とは逆に，SC・SSWへの期待感は極めて高い。教員がSC・SSWを求めているが協働できていない実態を打開する工夫が必要である。



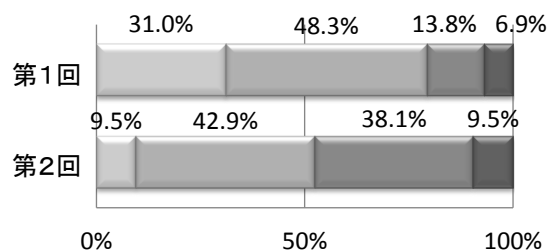
設問 19. SC・SSWの存在は、生徒理解に役立つ。

\* 期待感は大きいものの、第2回で肯定的意見が減少している。支援がうまくいった事例を積み重ねられなかったからではないか。



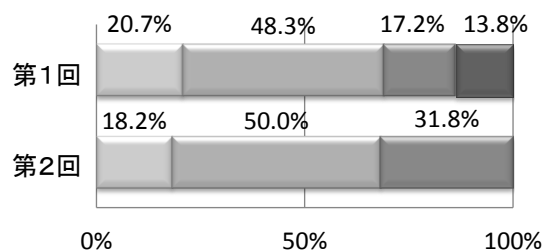
設問 20. SC・SSWの存在は、生徒への働きかけに役立つ。

\* 設問 19 と同様のことが考えられる。



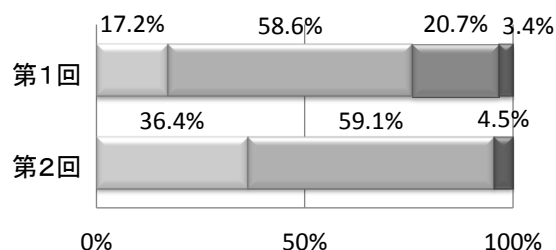
設問 21. SC・SSWの存在は、保護者への働きかけに役立つ。

\* 期待感は大いだが、第2回に否定的意見の変化はなく、まだまだ事例の積み重ねが必要である。



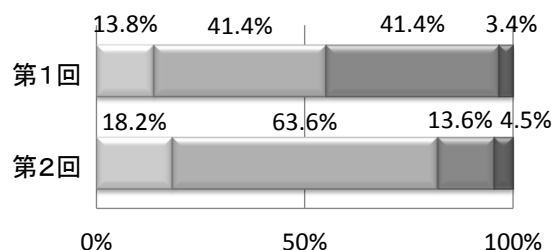
設問 22. 教室の環境を整え、生徒が落ち着いて授業を受けられるようにしている。

\* 肯定的意見が多く、第2回にはさらにその傾向が顕著である。授業に負担感を感じながらも授業環境が整ってきているので、達成感もあるのではないか。



設問 23. 特別な教育的支援を必要とする生徒の理解を促すために、教材・教具等を工夫している。

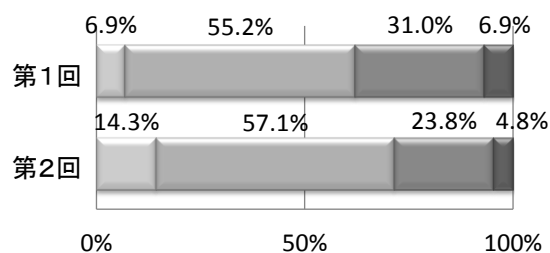
\* 教材・教具等の工夫が増えている様子がうかがえる。教員研修などを通して、個々の教員が様々な工夫をし始めたのではないか。



強くそう思う
  そう思う
  あまりそう思わない
  そう思わない

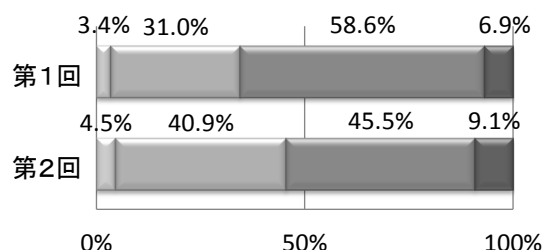
設問 24. 授業の中で、ワークシート等を活用し、特別な教育的支援が必要な生徒も学習しやすいようにしている。

\* 上記設問と同様、教員が支援の必要な生徒にもわかりやすい工夫をし始めている。



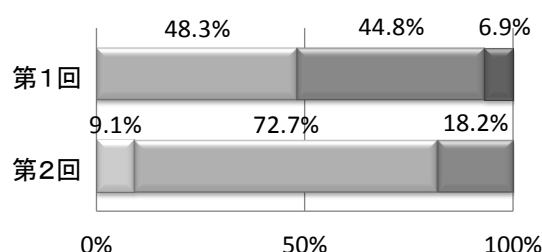
設問 25. 生徒に学習意欲があると感じる。

\* 生徒はまだまだ学習意欲があるとは言い難い状況ではある。今後、教員の授業改善により生徒の学習意欲の向上につながることを期待したい。



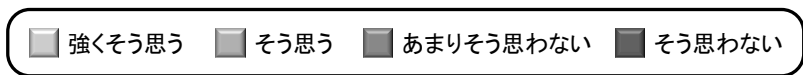
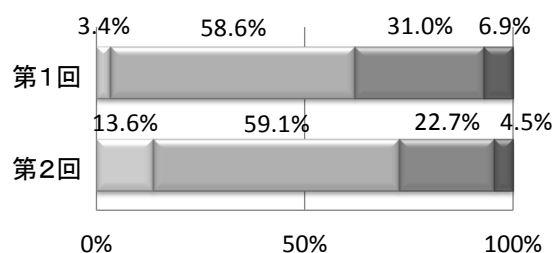
設問 26. 生徒が学校生活に満足していると感じる。

\* 生徒の学習意欲に比べ、学校生活への満足度が高いと感じている教員が、第2回に大きく増加している。学校生活の満足度が学習意欲の向上につながることを期待したい。



設問 27. 学校と保護者は信頼関係を築いていると感じる。

\* 保護者との対応に負担感がないのと同様の結果である。



第1回のアンケート実施時期は、新しい支援の形がスタートして間がなかった。したがって、支援への評価が低かったが、SC・SSWとの協働などへの期待感は大きかった。したがって、研究が進み、実績を積み重ねる中で、情報共有・支援実績・協働実績に関する評価の推移が注目点となった。

しかし第2回の結果は、実際に支援を進めていくことに関しての否定的回答が増えている。期待感が大きかった分、ケース会議でのアセスメント・プランニングについての共通理解が図れなかったことが、肯定感が上がらずに下がってしまった大きな要因では

ないかと考える。また、研修会などを通して支援への理解が高まった分、できない事やうまくいってない事を意識するようになったこともこの結果につながったのではないかと考える。

支援の必要な生徒への授業での対応に負担感を感じているが「対応がうまくいくことで達成感を感じることができる」、「SC・SSWとの協働・存在が支援教育の充実に役立つ」という設問には肯定的意見が多くあり、やはり期待感は大いいと考える。

SC・SSWとの協働で支援教育を充実させていくために、この1年で見えてきた課題を、2年目の研究に生かしていきたい。

#### (4) - 2 生徒対象

対象：定時制全生徒

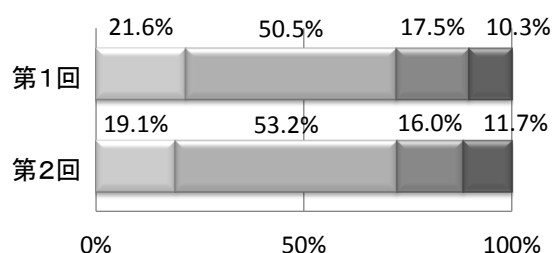
(1年生47名, 2年生39名, 3年生38名, 4年生1名 計125名)

実施日：第1回 平成28年6月22日 第2回 平成29年1月11日(3,4年)  
2月15日(1,2年)

回収数：第1回 97名 第2回 94名

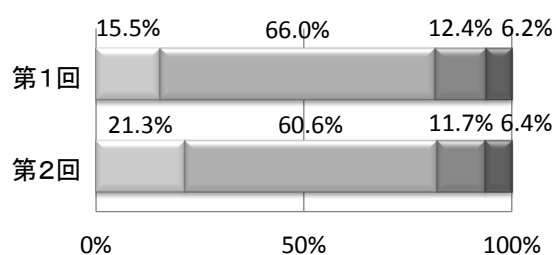
設問1. 落ち着いて受けることができる授業が多い。

\* 肯定的意見が多い。教員の意識と一致している。



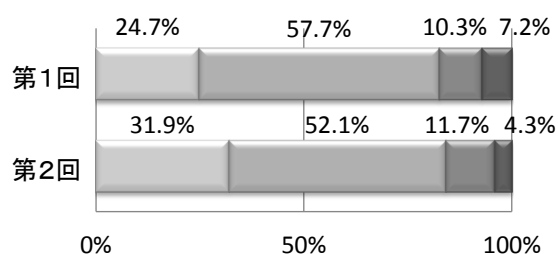
設問2. プリントが見やすく理解しやすいように工夫されている授業が多い。

\* 年度当初から肯定的意見が多いのは、定時制経験の長い教員も多く、プリントなどはすでに改良がされているのではないかと考える。



設問3. わからないことがあると、ていねいに対応してもらえる授業が多い。

\* 肯定的意見が多い。クラス人数も少なく、比較的きめ細かく丁寧な授業ができていないのではないかと考える。

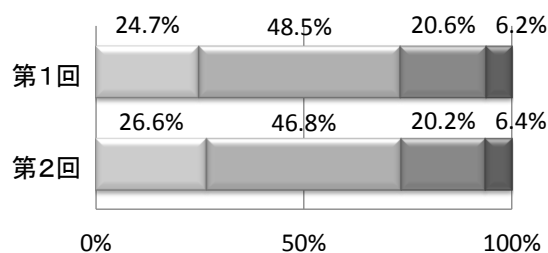


強く思う
  そう思う
  あまりそう思わない
  そう思わない



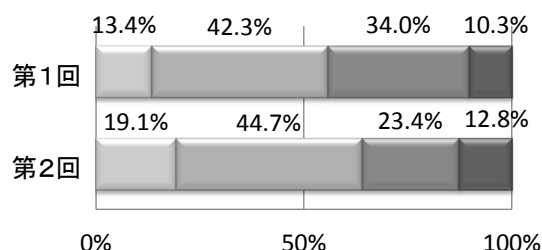
設問4. ノートを写したり、プリントを書いたりしやすい速さの授業が多い。

\* 肯定的意見が多い。生徒の進度に合わせた授業ができていないのではないか。



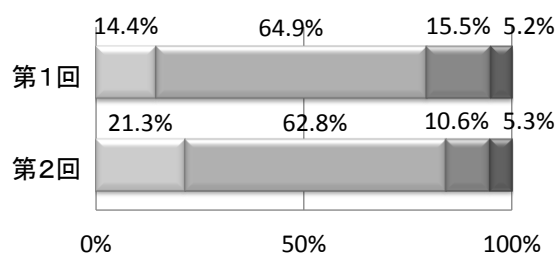
設問5. 授業に興味を持てたり理解しやすくするための工夫（プロジェクタやタブレットの使用など）がされている授業が多い。

\* 授業関係の設問の中では否定的意見が多い。第2回に若干の改善が見られるのは、教員の教材の工夫があると考えられる。しかし、視聴覚機器の設備の充実も必要である。



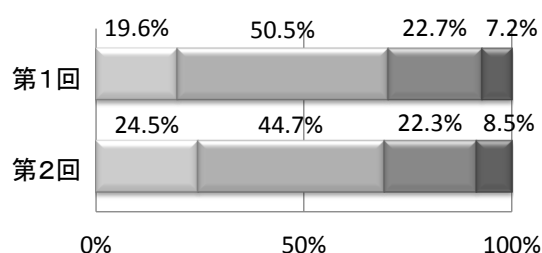
設問6. 先生が黒板に書くことや説明することはわかりやすい。

\* 設問2と同様、教員はわかりやすい板書や説明に心掛けているものと思われる。

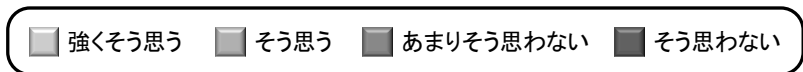
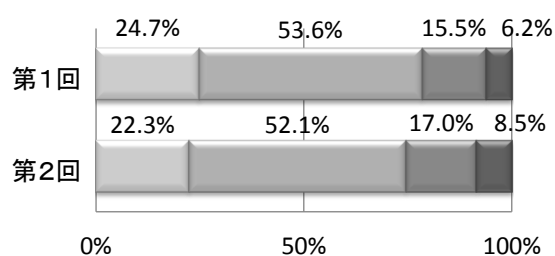


設問7. 友達と教え合ったり、先生に質問をしたりしやすい雰囲気がある。

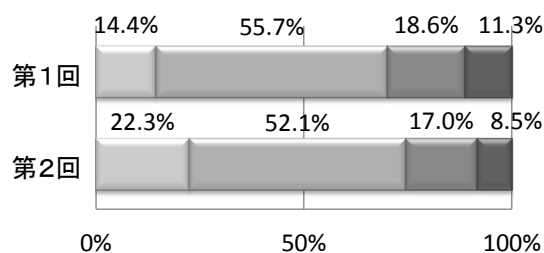
\* 肯定的意見が多いが、3割程度の生徒が否定的回答である。コミュニケーションの苦手な生徒が一定数いることがうかがえる。



設問8. 黒板に書かれたことや説明されたことをしっかりとノートにとったり、忘れ物がないようにしたりと、意欲的に学習に取り組んでいる。

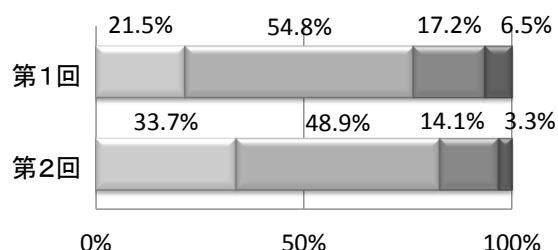


設問9. 授業の内容を理解している。



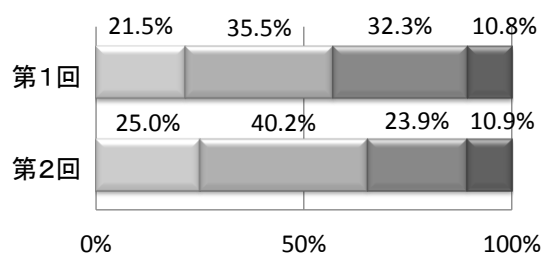
設問10. 授業に満足している。

\* 設問8～10を通して、授業に対しては肯定的な回答が多い。ただどの設問に対しても2割程度の否定的意見があり、同じ生徒がすべてに否定的であれば支援が必要である。



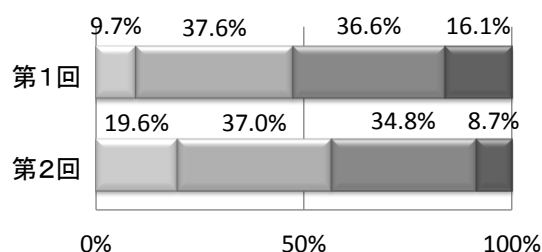
設問11. 目標を持って学校生活を送っている。

\* 授業に対しては肯定的意見が多かったが、目標を持った学校生活となると意見が拮抗する。あとの進路展望に関する設問と対応しているようである。



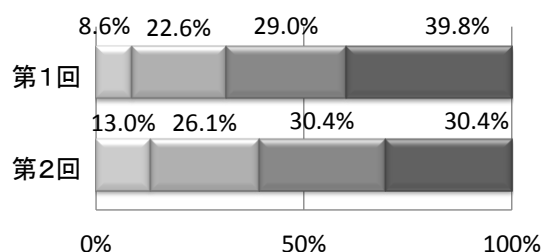
設問12. 勉強が楽しく感じられる。

\* 設問10までで、授業に関する満足度は高かったものの、楽しいとまでは感じられないようである。今後の授業改善が必要である。



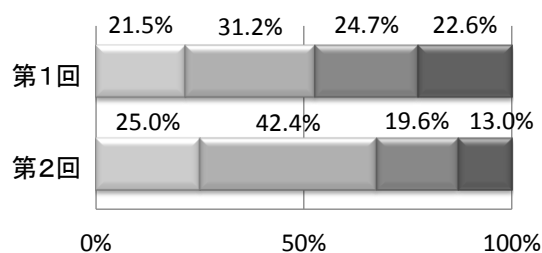
設問13. 始業前・放課後など学校で学習することがある。

\* アルバイトなどで時間がないのか、意欲が足りないのか、否定的意見が多い。授業前後の補習など、生徒が学習できる機会を設ける必要がある。



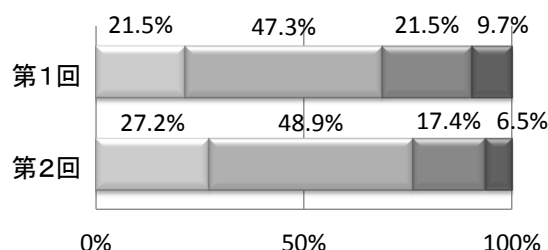
設問14. 卒業後の進路について考えられる。

\* 目標を持った学校生活と同様に、否定的意見が多い。ただ、第2回に否定的意見が減っているのは、進路指導部や担任の指導によるものと考えられる。



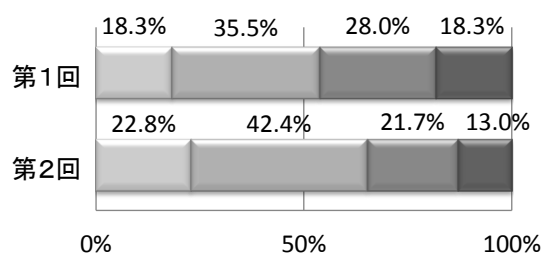
設問15. 先生は、生徒を理解し生徒にあった指導をしてくれる。

\* 漠然とした設問であるが、肯定的意見が多い。クラス人数が少ないこともあり、教員が個々の生徒に対応できていることがうかがえる。



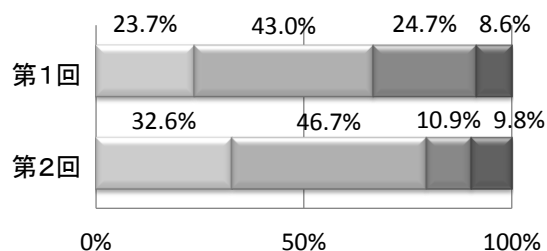
設問16. 先生やスクールカウンセラーに、相談しやすい雰囲気がある。

\* 否定的意見が一定数みられる。第2回では減っているとはいえ、3割を超えている。教員というよりも、SCに接する機会のある生徒が少ないためではないか。



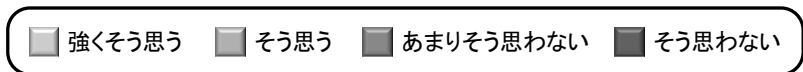
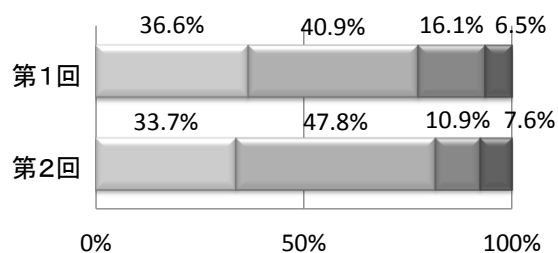
設問17. 学校生活は充実していて楽しい。

\* 肯定的意見が第2回では約8割となっている。学校での居場所ができたこともその一因と考えられる。生徒の学校生活に対する満足が高まることは、教職員の大きな励みとなる。



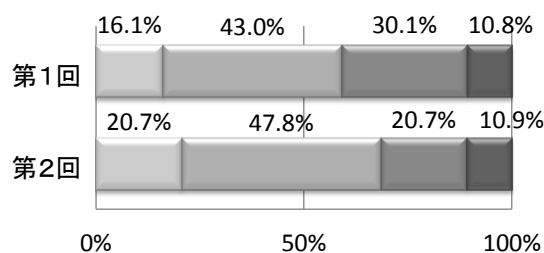
設問18. 友人関係がうまくいっている。

\* 2回とも肯定的意見が8割程度となった。ただ、生徒の普段の様子からも、一定数の生徒が友人関係に苦労している。



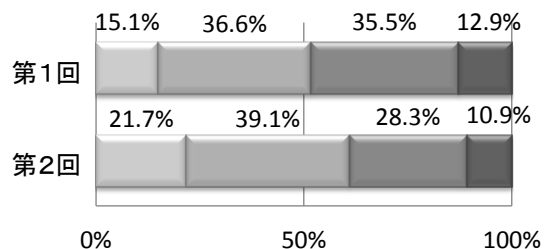
設問 19. 学校生活を通して、問題を解決する能力が<sup>あ</sup>ついた。

\* 授業の満足度などが、肯定的意見の増加につながったのではないか。



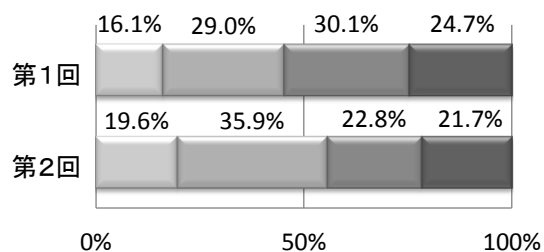
設問20. 健康に対する意識が高まった。

\* 生徒の健康への意識は高いとは言い難い。健康への意識は、自分を大事にするという自己肯定感につながる。今後、授業やHRでの指導の工夫が必要である。



設問21. 自分のことを好きだと思える。

\* 2回とも肯定・否定が拮抗している。学習指導・生活指導などの取り組みを通して生徒の自己肯定感を高めることが必要である。



強くそう思う
  そう思う
  あまりそう思わない
  そう思わない

第1回の結果は全般的に肯定的意見が多い傾向であるが、自己肯定的な回答が少ないことへの対応が課題として挙げられる。また、授業における教材や教具等の工夫、気軽に相談事を話せる環境などの改善も、研究の成果として着目する点であった。

第2回の回答も、ほぼ肯定的意見が多い傾向であり、どの設問に関しても多少ではあるが肯定的意見が増えている。授業の工夫に関する肯定的意見が増えているが、学習に対する意欲に関してはまだまだ否定的意見が多い。自分からすすんで学習するという意識までは至っていないと感じる。しかし、卒業後の進路についての設問で、第2回の否定的意見が減っているのは、進路指導部や担任の指導により進路実現ができたことによるものと考えられる。

自己肯定感に関する設問に関しては、第2回も否定的意見が多い。学習指導・進路指導・生徒指導など様々な取り組みとともに、自己の健康に対する意識を高めるための学習も必要である。

### (4) - 3 保護者対象

対 象：生徒保護者 125名

実施日：第1回 平成28年7月

第2回 平成29年1, 2月

学年により実施時期が異なる。

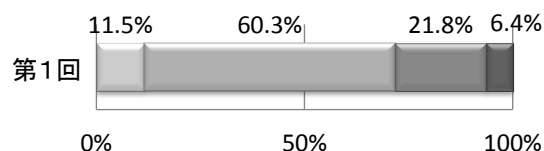
回収数：第1回 78名

第2回 33名

第2回の回答数が極めて少なかったため、第1回の結果のみを検討材料とする。

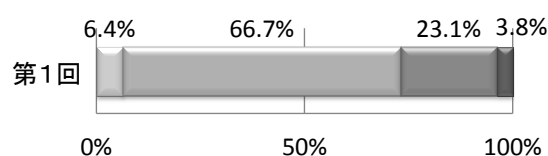
設問1. 授業に意欲的に取り組んでいますか。

\* 肯定的意見が7割を超えている。教員の意識は5割に達しておらず、意識の違いが見られる。「意欲的」と感じる基準が教員と異なるのかもしれない。



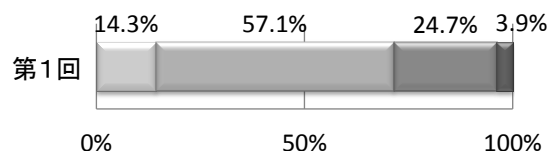
設問2. 授業の内容を理解していますか。

\* 肯定的意見が7割を超えており、生徒の意識とほぼ一致している。



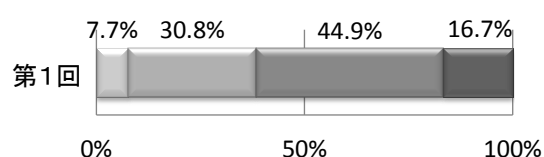
設問3. 授業に満足していますか。

\* 設問2と同様の結果である。



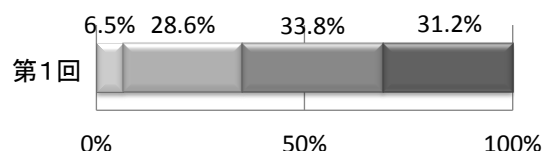
設問4. 勉強を楽しんでいると感じられていますか。

\* やはり勉強を楽しんでいると感じられるまでには達していないようである。生徒の意識とほぼ同じで、教員側の授業改善が求められている。



設問5. 始業前・放課後など学校で学習することがありますか。

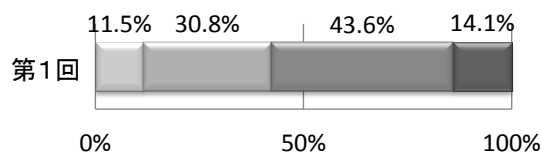
\* 生徒の意識と同様で、学校での学習はほぼ授業時間に限られている。生徒が学習する機会を増やす必要がある。



■ 強く思う ■ そう思う ■ あまりそう思わない ■ そう思わない

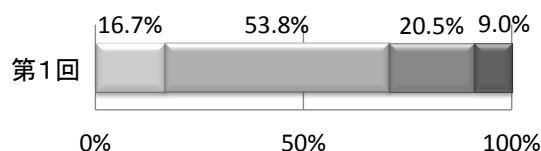
設問6. 日々、目標を持って学校生活を送っていますか。

- \* 傾向としては生徒の意識に近いが、生徒以上に否定的意見が多い。進路指導などにより、保護者の理解のもと、生徒に目標設定をさせることが必要である。



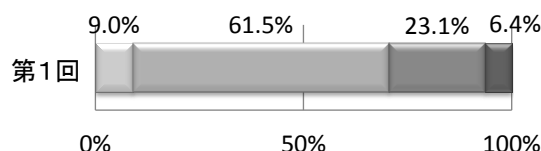
設問7. 学校生活は充実していて楽しいと感じられていますか。

- \* 肯定的意見が多く、教員の意識や生徒の意識と一致している。学校生活の楽しさを学習意欲の向上につなげていく工夫が必要である。



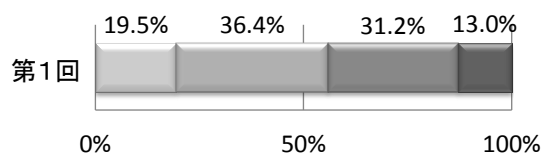
設問8. 学校生活を通して、問題を解決する能力がついていますか。

- \* 答えにくい設問であったかもしれない。生徒と同様、授業への満足度が肯定的意見につながっているのかもしれない。



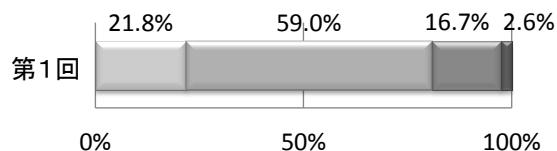
設問9. 卒業後の進路について考えることができますか。

- \* 生徒の意識と同様、肯定・否定が拮抗している。HRなどを通して、早い段階からの進路指導が必要である。



設問10. 友人関係がうまくいっていますか。

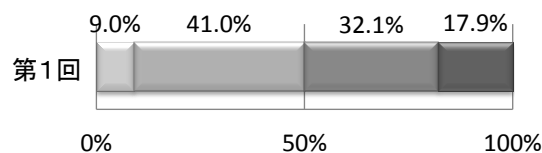
- \* 肯定的意見が8割を超え、生徒の意識と一致している。ただ、生徒も保護者も否定的な意見の場合（検証はできないが）心配である。



強く思う
  そう思う
  あまりそう思わない
  そう思わない

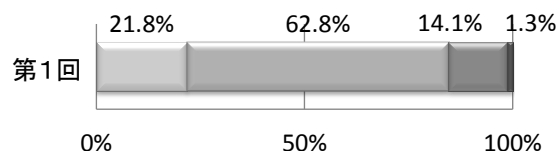
設問11. 規則正しい生活を送っていますか。

- \* 肯定・否定がほぼ同数である。半数の生徒が規則正しい生活を送れていないのは問題であり、今後、授業やHRで詳しい調査が必要と思われる。



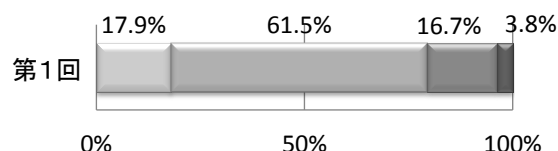
設問 12. 教員は、お子様を理解し指導をしていますか。

- \* 肯定的意見が多かったのは生徒と同様である。中学校に比べクラス人数が少ないことや、ていねいな入学前の面談などの効果ではないか。



設問 13. 教員やスクールカウンセラーに、相談しやすい雰囲気がありますか。

- \* 生徒よりも肯定的意見が多い。SCと直接話している保護者は多くはないが、教員と保護者の関係が悪くないことがうかがえる。



全般的に肯定的意見が多く、生徒の回答と同様の傾向が見られる。学校へ楽しく登校している面や授業の理解度での肯定的意見は多い。中学校で不登校を経験している生徒が多く、中学校に比べ楽しく登校できていることが保護者の肯定的意見に反映していると思われる。授業についても生徒の状況に合わせた工夫がなされていることが、理解度での肯定的意見になっていると思われる。しかし、まだ授業が楽しいとまでには至っていない。一層の授業改善の必要が感じられる。

一方、目標・進路等についての設問では否定的な回答が多くなっている。進路を意識して、目標を持って学習できるような指導が必要であると考えます。

設問 12・13 から、保護者は学校に対して肯定的な印象を持っていると思われる。保護者と継続的に連携をとっていくことは今後も重要である。

保護者へのアンケートに関しては、第2回の回収率が大幅に低くなった、回収方法の検討が必要である。

### 3. 調査研究の到達点

調査研究の到達目標として、設定した四点について本年度の到達点は以下のとおりである。

- \* システム化されたケース会議の実施および様々な「困り」を抱える生徒への支援方法の確立については、全員参加によるケース会議を想定し、その開催を目標とした。しかし、本年度はケース会議の開催に至る過程や参加者の人数・対象についての事例を蓄積するにとどまり、システム化までは至らなかった。
- \* アセスメントシートの開発を掲げたが、実際には既存のフォーマットを用いることが前提であり、新規の開発はできなかった。ただし、中学時の欠席状況を記入する欄を追加して高校版として使用できるようフォーマットの改良を行った。(資料3) また、必要になった時に作成しているのでは即応性に問題があることから、次年度の新入生から中学校からの情報や入学前の生徒本人および保護者との面談で得た情報を反映してアセスメントシートが年度当初に全員分完成するよう情報収集のフォーマットの作成等を整備した。
- \* 学校全体での効果的な支援を行うためには、必ずしもケース会議への全員参加にこだわることなく、いかにして情報共有の校内体制を構築するかが重要であるとの結論を得た。SCとSSWについては勤務日における生徒観察の機会を増やすとともに、担任等の会話に接する機会を増やすために居室のあり方を見直すことでコミュニケーションや情報共有の改善を図ることとした。また、「支援コーディネーター」が支援の中心に位置づけられるような校内体制を構築した。
- \* マニュアルの作成については、
  - ・ SC・SSWとの協働および校内体制構築マニュアル
  - ・ ケース会議運営マニュアル
  - ・ 「支援コーディネーター」養成マニュアル
  - ・ 個別の支援実践事例などを想定したが、具体化できたものは、
  - ・ 入学予定生徒の情報収集・集約の手順
  - ・ 生徒情報の管理に関するルールの2点であった。

その他のマニュアルについては、いきなり普遍的なマニュアル作成ではなく、本校において「校内体制のあり方」「会議の開催のあり方」等を確定することが先決であり、その先に普遍化できるものがあればマニュアル作成を検討すべきとの結論を得た。個別の支援実践事例については本年度の事例蓄積に加え、更なる蓄積を重ねることで「困り」の内容ごとに支援のあり方を大別できることの方が重要との結論を得た。



## IV 次年度の課題

### 1. 調査研究内容

2年目においても1年目に引き続き以下の三項目を調査研究の内容とする。

- (1) 具体的な支援方法の研究
- (2) 支援に向けた校内体制の確立
- (3) 支援を支える知識・理解の深化

### 2. 調査研究目標

各項目について目標を以下のとおり設定する。

#### (1) 具体的な支援方法の研究

- \* 中学校から得た新入生の情報を生徒の本校定着に活かすため、その情報によって作成するアセスメントシートを用いたケース会議を効果的に開催する。
- \* 情報の管理と活用について今年度策定したものを実践する。
- \* 必要な情報に迅速にアクセスするための「インデックス機能」を構築する。
- \* ケース会議の開催を通して、引き続き事例の蓄積を行い、ケース会議の開催システムについて研究し確立する。
- \* ソーシャル・スキル・トレーニングの実施を具体化する。

#### (2) 支援に向けた校内体制の確立

- \* 「支援コーディネーター」の位置づけおよび役割を支援の実践を通して検証していく。
- \* 初年度のSCとSSWの勤務体制を基に、より良い勤務形態・体制を検討する。

#### (3) 支援を支える知識・理解の深化

- \* ケース会議やSCやSSWとの協働の経験などによる支援することへの理解を進める。
- \* 生徒の特性とその対応についての知識を高めるための研修をさらに重ねる。
- \* 生徒支援を充実・発展させるために、他校の研究成果や実践事例を引き続き調査・研究する。

年度入学生 中学校訪問の記録

ふりがな			出身中学校		
生徒名	男・女				
生年月日	年 月 日	生まれ	4月1日	現在	歳
訪問日	訪問者	応対者			
欠席	1年 日	2年 日	3年 日	卒業	新卒 or 過年度卒
* 家族構成 生活をともにしている家族/その他 ※ 保護者の国籍(外国籍の場合、日本語がわかるか)					
父(同居・離別・死別)	母(同居・離別・死別)				
兄弟姉妹	その他(祖父・祖母・他)				
特記事項					
* 生活保護・就学援助などの受給状況 児童相談所などの関係機関等					
本人の状況					
* 成育歴 例えは：小学校時代はどうだったか 等					
療育歴 例えは：言葉の教室へ通っていた、児童福祉センターにかかっていた 等					
* 中学校で何か問題(気になること)はあったか 例えは：不登校、問題行動、家庭の問題 等					

* 問題(気になること)が起こった理由について思い当たることがあるか	
* 特に不登校があった場合は、不登校に至った経緯とその後の状況 例えは：きっかけ、いつ、どのような状態(具体例：腹痛、朝起きられない、学校の門をくぐれない、等)を呈していたか 等	
* 問題(気になること)に対して学校が取られた対応 例えは：スクールカウンセラー、適応教室、相談室、相談室、治療室 等	
* その結果、どうなったのか 例えは：どれ程まで改善されたか、保健室・別室登校・クラスに入れるようになった 等 残された課題	
* 家庭は、その問題(気になること)をどのように捉えていたか 例えは：すごく心配していた、ほったらかしだった、いろんなところに相談にいった 等	

* 対人関係・友人関係	
* 健康について（身体的なこと・精神的なこと） 特に精神疾患・心の病氣・発達障害などが疑われることはないか、障害者手帳の有無 等 ある場合は、・本人は知っているか、・中学から聞いたことを、保護者や本人に伝えてもいいか ※ 個別の教育支援計画及び個別の指導計画があるか	
* 興味・関心の対象 例えば：部活動・好きなこと・得意なこと、地域での活動 等	
* 現状についての思い・希望 例えば：高校への期待 等	
* 本校での定着を図るためのアドバイス	
* その他	

家庭の状況	
* 家の様子 住居（一軒家・マンション・公団 他）、経済状況など	
* 父の状況・意向 特記事項・学校への関わり具合など	
* 母の状況・意向 特記事項・学校への関わり具合など	
* 兄弟姉妹・その他関係者について特記事項	
本人に関する情報	
* 行動の特徴 何かあれば	
* 学力・学習面 例えば：読み書き・計算の到達状況、得意教科・不得意教科 等	
* 言語コミュニケーション 特に問題があるか	

## 意識調査アンケート結果（教職員）

設問 1.	回 答 数					割 合			
	4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
第 1 回	6	13	7	3	29	20.7%	44.8%	24.1%	10.3%
第 2 回	4	10	6	2	22	18.2%	45.5%	27.3%	9.1%

設問 2.	回 答 数					割 合			
	4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
第 1 回	5	21	3	0	29	17.2%	72.4%	10.3%	0.0%
第 2 回	6	15	1	0	22	27.3%	68.2%	4.5%	0.0%

設問 3.	回 答 数					割 合			
	4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
第 1 回	4	13	8	4	29	13.8%	44.8%	27.6%	13.8%
第 2 回	2	8	10	2	22	9.1%	36.4%	45.5%	9.1%

設問 4.	回 答 数					割 合			
	4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
第 1 回	10	16	3	0	29	34.5%	55.2%	10.3%	0.0%
第 2 回	11	6	4	1	22	50.0%	27.3%	18.2%	4.5%

設問 5.	回 答 数					割 合			
	4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
第 1 回	0	16	11	2	29	0.0%	55.2%	37.9%	6.9%
第 2 回	2	10	9	1	22	9.1%	45.5%	40.9%	4.5%

設問 6.	回 答 数					割 合			
	4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
第 1 回	2	15	8	4	29	6.9%	51.7%	27.6%	13.8%
第 2 回	3	9	8	2	22	13.6%	40.9%	36.4%	9.1%

設問 7.	回 答 数					割 合			
	4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
第 1 回	0	14	8	7	29	0.0%	48.3%	27.6%	24.1%
第 2 回	0	10	9	2	21	0.0%	47.6%	42.9%	9.5%

設問 8.	回 答 数					割 合			
	4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
第 1 回	7	15	4	3	29	24.1%	51.7%	13.8%	10.3%
第 2 回	7	12	2	1	22	31.8%	54.5%	9.1%	4.5%

## 資料 2

設問 9.	回 答 数					割 合			
	4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
第 1 回	0	15	8	6	29	0.0%	51.7%	27.6%	20.7%
第 2 回	1	11	8	1	21	4.8%	52.4%	38.1%	4.8%

設問 10.	回 答 数					割 合			
	4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
第 1 回	2	18	2	7	29	6.9%	62.1%	6.9%	24.1%
第 2 回	1	8	8	4	21	4.8%	38.1%	38.1%	19.0%

設問 11.	回 答 数					割 合			
	4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
第 1 回	6	17	3	3	29	20.7%	58.6%	10.3%	10.3%
第 2 回	1	13	6	1	21	4.8%	61.9%	28.6%	4.8%

設問 12.	回 答 数					割 合			
	4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
第 1 回	8	13	7	1	29	27.6%	44.8%	24.1%	3.4%
第 2 回	4	12	5	0	21	19.0%	57.1%	23.8%	0.0%

設問 13.	回 答 数					割 合			
	4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
第 1 回	3	11	13	2	29	10.3%	37.9%	44.8%	6.9%
第 2 回	3	7	11	0	21	14.3%	33.3%	52.4%	0.0%

設問 14.	回 答 数					割 合			
	4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
第 1 回	2	7	13	7	29	6.9%	24.1%	44.8%	24.1%
第 2 回	2	5	12	2	21	9.5%	23.8%	57.1%	9.5%

設問 15.	回 答 数					割 合			
	4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
第 1 回	4	23	1	1	29	13.8%	79.3%	3.4%	3.4%
第 2 回	3	12	5	1	21	14.3%	57.1%	23.8%	4.8%

設問 16.	回 答 数					割 合			
	4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
第 1 回	2	11	6	10	29	6.9%	37.9%	20.7%	34.5%
第 2 回	1	8	9	3	21	4.8%	38.1%	42.9%	14.3%

設問 17.	回 答 数					割 合			
	4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
第 1 回	2	10	6	11	29	6.9%	34.5%	20.7%	37.9%
第 2 回	0	8	10	3	21	0.0%	38.1%	47.6%	14.3%

設問 18.	回 答 数					割 合			
	4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
第 1 回	11	13	3	2	29	37.9%	44.8%	10.3%	6.9%
第 2 回	4	15	2	1	22	18.2%	68.2%	9.1%	4.5%

設問 19.	回 答 数					割 合			
	4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
第 1 回	8	14	4	3	29	27.6%	48.3%	13.8%	10.3%
第 2 回	3	10	5	4	22	13.6%	45.5%	22.7%	18.2%

設問 20.	回 答 数					割 合			
	4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
第 1 回	9	14	4	2	29	31.0%	48.3%	13.8%	6.9%
第 2 回	2	9	8	2	21	9.5%	42.9%	38.1%	9.5%

設問 21.	回 答 数					割 合			
	4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
第 1 回	6	14	5	4	29	20.7%	48.3%	17.2%	13.8%
第 2 回	4	11	7	0	22	18.2%	50.0%	31.8%	0.0%

設問 22.	回 答 数					割 合			
	4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
第 1 回	5	17	6	1	29	17.2%	58.6%	20.7%	3.4%
第 2 回	8	13	0	1	22	36.4%	59.1%	0.0%	4.5%

設問 23.	回 答 数					割 合			
	4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
第 1 回	4	12	12	1	29	13.8%	41.4%	41.4%	3.4%
第 2 回	4	14	3	1	22	18.2%	63.6%	13.6%	4.5%

設問 24.	回 答 数					割 合			
	4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
第 1 回	2	16	9	2	29	6.9%	55.2%	31.0%	6.9%
第 2 回	3	12	5	1	21	14.3%	57.1%	23.8%	4.8%

## 資料 2

設問 25.	回 答 数					割 合			
	4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
第 1 回	1	9	17	2	29	3.4%	31.0%	58.6%	6.9%
第 2 回	1	9	10	2	22	4.5%	40.9%	45.5%	9.1%

設問 26.	回 答 数					割 合			
	4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
第 1 回	0	14	13	2	29	0.0%	48.3%	44.8%	6.9%
第 2 回	2	16	4	0	22	9.1%	72.7%	18.2%	0.0%

設問 27.	回 答 数					割 合			
	4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
第 1 回	1	17	9	2	29	3.4%	58.6%	31.0%	6.9%
第 2 回	3	13	5	1	22	13.6%	59.1%	22.7%	4.5%

## 意識調査アンケート結果（生徒対象：学年別の比較）

設問 1.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1年	第1回	6	19	6	2	33	18.2%	57.6%	18.2%	6.1%
	第2回	5	20	4	3	32	15.6%	62.5%	12.5%	9.4%
2年	第1回	8	21	3	1	33	24.2%	63.6%	9.1%	3.0%
	第2回	4	17	3	1	25	16.0%	68.0%	12.0%	4.0%
3年	第1回	7	9	8	7	31	22.6%	29.0%	25.8%	22.6%
	第2回	9	13	8	7	37	24.3%	35.1%	21.6%	18.9%

設問 2.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1年	第1回	5	22	5	1	33	15.2%	66.7%	15.2%	3.0%
	第2回	2	22	5	3	32	6.3%	68.8%	15.6%	9.4%
2年	第1回	4	24	4	1	33	12.1%	72.7%	12.1%	3.0%
	第2回	7	15	3	0	25	28.0%	60.0%	12.0%	0.0%
3年	第1回	6	18	3	4	31	19.4%	58.1%	9.7%	12.9%
	第2回	11	20	3	3	37	29.7%	54.1%	8.1%	8.1%

設問 3.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1年	第1回	11	18	3	1	33	33.3%	54.5%	9.1%	3.0%
	第2回	7	21	3	1	32	21.9%	65.6%	9.4%	3.1%
2年	第1回	4	21	5	3	33	12.1%	63.6%	15.2%	9.1%
	第2回	9	12	4	0	25	36.0%	48.0%	16.0%	0.0%
3年	第1回	9	17	2	3	31	29.0%	54.8%	6.5%	9.7%
	第2回	14	16	4	3	37	37.8%	43.2%	10.8%	8.1%

設問 4.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1年	第1回	8	18	6	1	33	24.2%	54.5%	18.2%	3.0%
	第2回	4	16	10	2	32	12.5%	50.0%	31.3%	6.3%
2年	第1回	8	15	9	1	33	24.2%	45.5%	27.3%	3.0%
	第2回	8	12	5	0	25	32.0%	48.0%	20.0%	0.0%
3年	第1回	8	14	5	4	31	25.8%	45.2%	16.1%	12.9%
	第2回	13	16	4	4	37	35.1%	43.2%	10.8%	10.8%

設問 5.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1年	第1回	1	19	11	2	33	3.0%	57.6%	33.3%	6.1%
	第2回	6	13	9	4	32	18.8%	40.6%	28.1%	12.5%
2年	第1回	6	9	15	3	33	18.2%	27.3%	45.5%	9.1%
	第2回	6	10	7	2	25	24.0%	40.0%	28.0%	8.0%
3年	第1回	6	13	7	5	31	19.4%	41.9%	22.6%	16.1%
	第2回	6	19	6	6	37	16.2%	51.4%	16.2%	16.2%

設問 6.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1年	第1回	3	25	4	1	33	9.1%	75.8%	12.1%	3.0%
	第2回	5	22	3	2	32	15.6%	68.8%	9.4%	6.3%
2年	第1回	3	22	7	1	33	9.1%	66.7%	21.2%	3.0%
	第2回	6	16	3	0	25	24.0%	64.0%	12.0%	0.0%
3年	第1回	8	16	4	3	31	25.8%	51.6%	12.9%	9.7%
	第2回	9	21	4	3	37	24.3%	56.8%	10.8%	8.1%



設問 7.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1 年	第 1 回	7	17	8	1	33	21.2%	51.5%	24.2%	3.0%
	第 2 回	4	15	10	3	32	12.5%	46.9%	31.3%	9.4%
2 年	第 1 回	6	19	6	2	33	18.2%	57.6%	18.2%	6.1%
	第 2 回	8	11	5	1	25	32.0%	44.0%	20.0%	4.0%
3 年	第 1 回	6	13	8	4	31	19.4%	41.9%	25.8%	12.9%
	第 2 回	11	16	6	4	37	29.7%	43.2%	16.2%	10.8%

設問 8.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1 年	第 1 回	7	20	5	1	33	21.2%	60.6%	15.2%	3.0%
	第 2 回	3	21	6	2	32	9.4%	65.6%	18.8%	6.3%
2 年	第 1 回	6	19	7	1	33	18.2%	57.6%	21.2%	3.0%
	第 2 回	8	10	6	1	25	32.0%	40.0%	24.0%	4.0%
3 年	第 1 回	11	13	3	4	31	35.5%	41.9%	9.7%	12.9%
	第 2 回	10	18	4	5	37	27.0%	48.6%	10.8%	13.5%

設問 9.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1 年	第 1 回	4	20	6	3	33	12.1%	60.6%	18.2%	9.1%
	第 2 回	4	18	7	3	32	12.5%	56.3%	21.9%	9.4%
2 年	第 1 回	5	16	10	2	33	15.2%	48.5%	30.3%	6.1%
	第 2 回	6	13	5	1	25	24.0%	52.0%	20.0%	4.0%
3 年	第 1 回	5	18	2	6	31	16.1%	58.1%	6.5%	19.4%
	第 2 回	11	18	4	4	37	29.7%	48.6%	10.8%	10.8%

設問 10.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1 年	第 1 回	7	17	7	2	33	21.2%	51.5%	21.2%	6.1%
	第 2 回	6	17	7	1	31	19.4%	54.8%	22.6%	3.2%
2 年	第 1 回	6	17	8	1	32	18.8%	53.1%	25.0%	3.1%
	第 2 回	11	10	3	0	24	45.8%	41.7%	12.5%	0.0%
3 年	第 1 回	7	17	1	3	28	25.0%	60.7%	3.6%	10.7%
	第 2 回	14	18	3	2	37	37.8%	48.6%	8.1%	5.4%

設問 11.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1 年	第 1 回	7	11	13	2	33	21.2%	33.3%	39.4%	6.1%
	第 2 回	6	10	11	4	31	19.4%	32.3%	35.5%	12.9%
2 年	第 1 回	4	14	12	2	32	12.5%	43.8%	37.5%	6.3%
	第 2 回	6	12	5	1	24	25.0%	50.0%	20.8%	4.2%
3 年	第 1 回	9	8	5	6	28	32.1%	28.6%	17.9%	21.4%
	第 2 回	11	15	6	5	37	29.7%	40.5%	16.2%	13.5%

設問 12.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1 年	第 1 回	4	14	11	4	33	12.1%	42.4%	33.3%	12.1%
	第 2 回	3	11	14	3	31	9.7%	35.5%	45.2%	9.7%
2 年	第 1 回	2	9	17	4	32	6.3%	28.1%	53.1%	12.5%
	第 2 回	6	8	8	2	24	25.0%	33.3%	33.3%	8.3%
3 年	第 1 回	3	12	6	7	28	10.7%	42.9%	21.4%	25.0%
	第 2 回	9	15	10	3	37	24.3%	40.5%	27.0%	8.1%

設問 13.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1 年	第 1 回	3	8	12	10	33	9.1%	24.2%	36.4%	30.3%
	第 2 回	1	6	11	13	31	3.2%	19.4%	35.5%	41.9%
2 年	第 1 回	1	5	10	16	32	3.1%	15.6%	31.3%	50.0%
	第 2 回	3	7	6	8	24	12.5%	29.2%	25.0%	33.3%
3 年	第 1 回	4	8	5	11	28	14.3%	28.6%	17.9%	39.3%
	第 2 回	8	11	11	7	37	21.6%	29.7%	29.7%	18.9%

設問 14.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1 年	第 1 回	4	11	11	7	33	12.1%	33.3%	33.3%	21.2%
	第 2 回	4	10	12	5	31	12.9%	32.3%	38.7%	16.1%
2 年	第 1 回	9	8	7	8	32	28.1%	25.0%	21.9%	25.0%
	第 2 回	7	12	2	3	24	29.2%	50.0%	8.3%	12.5%
3 年	第 1 回	7	10	5	6	28	25.0%	35.7%	17.9%	21.4%
	第 2 回	12	17	4	4	37	32.4%	45.9%	10.8%	10.8%

設問 15.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1 年	第 1 回	4	19	6	4	33	12.1%	57.6%	18.2%	12.1%
	第 2 回	6	14	8	3	31	19.4%	45.2%	25.8%	9.7%
2 年	第 1 回	5	14	11	2	32	15.6%	43.8%	34.4%	6.3%
	第 2 回	8	12	4	0	24	33.3%	50.0%	16.7%	0.0%
3 年	第 1 回	11	11	3	3	28	39.3%	39.3%	10.7%	10.7%
	第 2 回	11	19	4	3	37	29.7%	51.4%	10.8%	8.1%

設問 16.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1 年	第 1 回	6	15	9	3	33	18.2%	45.5%	27.3%	9.1%
	第 2 回	6	12	8	5	31	19.4%	38.7%	25.8%	16.1%
2 年	第 1 回	5	10	11	6	32	15.6%	31.3%	34.4%	18.8%
	第 2 回	3	10	8	3	24	12.5%	41.7%	33.3%	12.5%
3 年	第 1 回	6	8	6	8	28	21.4%	28.6%	21.4%	28.6%
	第 2 回	12	17	4	4	37	32.4%	45.9%	10.8%	10.8%

設問 17.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1 年	第 1 回	3	19	8	3	33	9.1%	57.6%	24.2%	9.1%
	第 2 回	6	16	6	3	31	19.4%	51.6%	19.4%	9.7%
2 年	第 1 回	10	10	12	0	32	31.3%	31.3%	37.5%	0.0%
	第 2 回	10	12	2	0	24	41.7%	50.0%	8.3%	0.0%
3 年	第 1 回	9	11	3	5	28	32.1%	39.3%	10.7%	17.9%
	第 2 回	14	15	2	6	37	37.8%	40.5%	5.4%	16.2%

設問 18.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1 年	第 1 回	11	14	7	1	33	33.3%	42.4%	21.2%	3.0%
	第 2 回	9	16	5	1	31	29.0%	51.6%	16.1%	3.2%
2 年	第 1 回	12	14	6	0	32	37.5%	43.8%	18.8%	0.0%
	第 2 回	9	12	2	1	24	37.5%	50.0%	8.3%	4.2%
3 年	第 1 回	11	10	2	5	28	39.3%	35.7%	7.1%	17.9%
	第 2 回	13	16	3	5	37	35.1%	43.2%	8.1%	13.5%

## 資料 2

設問 19.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1 年	第 1 回	3	15	11	4	33	9.1%	45.5%	33.3%	12.1%
	第 2 回	3	13	11	4	31	9.7%	41.9%	35.5%	12.9%
2 年	第 1 回	2	13	14	3	32	6.3%	40.6%	43.8%	9.4%
	第 2 回	4	16	2	2	24	16.7%	66.7%	8.3%	8.3%
3 年	第 1 回	10	12	3	3	28	35.7%	42.9%	10.7%	10.7%
	第 2 回	12	15	6	4	37	32.4%	40.5%	16.2%	10.8%

設問 20.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1 年	第 1 回	5	10	15	3	33	15.2%	30.3%	45.5%	9.1%
	第 2 回	3	13	9	6	31	9.7%	41.9%	29.0%	19.4%
2 年	第 1 回	3	11	13	5	32	9.4%	34.4%	40.6%	15.6%
	第 2 回	6	8	8	2	24	25.0%	33.3%	33.3%	8.3%
3 年	第 1 回	6	13	5	4	28	21.4%	46.4%	17.9%	14.3%
	第 2 回	11	15	9	2	37	29.7%	40.5%	24.3%	5.4%

設問 21.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1 年	第 1 回	3	9	15	6	33	9.1%	27.3%	45.5%	18.2%
	第 2 回	3	10	10	8	31	9.7%	32.3%	32.3%	25.8%
2 年	第 1 回	4	10	9	9	32	12.5%	31.3%	28.1%	28.1%
	第 2 回	4	9	6	5	24	16.7%	37.5%	25.0%	20.8%
3 年	第 1 回	8	8	4	8	28	28.6%	28.6%	14.3%	28.6%
	第 2 回	11	14	5	7	37	29.7%	37.8%	13.5%	18.9%

## 意識調査アンケート結果（保護者対象：学年別の比較）

設問 1.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1年	第1回	3	14	5	2	24	12.5%	58.3%	20.8%	8.3%
	第2回	2	5	6	2	15	13.3%	33.3%	40.0%	13.3%
2年	第1回	0	13	6	1	20	0.0%	65.0%	30.0%	5.0%
	第2回	0	3	3	0	6	0.0%	50.0%	50.0%	0.0%
3年	第1回	6	20	6	2	34	17.6%	58.8%	17.6%	5.9%
	第2回	3	11	0	0	14	21.4%	78.6%	0.0%	0.0%

設問 2.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1年	第1回	3	15	5	1	24	12.5%	62.5%	20.8%	4.2%
	第2回	2	6	6	1	15	13.3%	40.0%	40.0%	6.7%
2年	第1回	1	10	8	1	20	5.0%	50.0%	40.0%	5.0%
	第2回	0	2	4	0	6	0.0%	33.3%	66.7%	0.0%
3年	第1回	1	27	5	1	34	2.9%	79.4%	14.7%	2.9%
	第2回	1	13	0	0	14	7.1%	92.9%	0.0%	0.0%

設問 3.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1年	第1回	5	13	4	1	23	21.7%	56.5%	17.4%	4.3%
	第2回	3	4	7	1	15	20.0%	26.7%	46.7%	6.7%
2年	第1回	0	11	8	1	20	0.0%	55.0%	40.0%	5.0%
	第2回	0	2	4	0	6	0.0%	33.3%	66.7%	0.0%
3年	第1回	6	20	7	1	34	17.6%	58.8%	20.6%	2.9%
	第2回	2	11	1	0	14	14.3%	78.6%	7.1%	0.0%

設問 4.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1年	第1回	2	10	6	6	24	8.3%	41.7%	25.0%	25.0%
	第2回	0	6	8	1	15	0.0%	40.0%	53.3%	6.7%
2年	第1回	0	2	14	4	20	0.0%	10.0%	70.0%	20.0%
	第2回	0	1	5	0	6	0.0%	16.7%	83.3%	0.0%
3年	第1回	4	12	15	3	34	11.8%	35.3%	44.1%	8.8%
	第2回	2	8	2	2	14	14.3%	57.1%	14.3%	14.3%

設問 5.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1年	第1回	3	7	3	11	24	12.5%	29.2%	12.5%	45.8%
	第2回	0	1	5	9	15	0.0%	6.7%	33.3%	60.0%
2年	第1回	0	3	10	6	19	0.0%	15.8%	52.6%	31.6%
	第2回	1	0	3	2	6	16.7%	0.0%	50.0%	33.3%
3年	第1回	2	12	13	7	34	5.9%	35.3%	38.2%	20.6%
	第2回	1	4	5	4	14	7.1%	28.6%	35.7%	28.6%

設問 6.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1年	第1回	3	6	10	5	24	12.5%	25.0%	41.7%	20.8%
	第2回	1	4	5	5	15	6.7%	26.7%	33.3%	33.3%
2年	第1回	0	7	9	4	20	0.0%	35.0%	45.0%	20.0%
	第2回	0	3	3	0	6	0.0%	50.0%	50.0%	0.0%
3年	第1回	6	11	15	2	34	17.6%	32.4%	44.1%	5.9%
	第2回	2	7	4	1	14	14.3%	50.0%	28.6%	7.1%

設問 7.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1年	第1回	3	12	6	3	24	12.5%	50.0%	25.0%	12.5%
	第2回	2	7	6	0	15	13.3%	46.7%	40.0%	0.0%
2年	第1回	2	9	8	1	20	10.0%	45.0%	40.0%	5.0%
	第2回	0	5	1	0	6	0.0%	83.3%	16.7%	0.0%
3年	第1回	8	21	2	3	34	23.5%	61.8%	5.9%	8.8%
	第2回	3	9	1	1	14	21.4%	64.3%	7.1%	7.1%

設問 8.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1年	第1回	1	13	7	3	24	4.2%	54.2%	29.2%	12.5%
	第2回	1	6	7	1	15	6.7%	40.0%	46.7%	6.7%
2年	第1回	0	13	6	1	20	0.0%	65.0%	30.0%	5.0%
	第2回	0	4	2	0	6	0.0%	66.7%	33.3%	0.0%
3年	第1回	6	22	5	1	34	17.6%	64.7%	14.7%	2.9%
	第2回	4	9	1	0	14	28.6%	64.3%	7.1%	0.0%

設問 9.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1年	第1回	3	4	11	6	24	12.5%	16.7%	45.8%	25.0%
	第2回	1	4	6	4	15	6.7%	26.7%	40.0%	26.7%
2年	第1回	1	9	7	2	19	5.3%	47.4%	36.8%	10.5%
	第2回	0	3	3	0	6	0.0%	50.0%	50.0%	0.0%
3年	第1回	11	15	6	2	34	32.4%	44.1%	17.6%	5.9%
	第2回	7	7	0	0	14	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%

設問 10.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1年	第1回	5	14	5	0	24	20.8%	58.3%	20.8%	0.0%
	第2回	3	8	4	0	15	20.0%	53.3%	26.7%	0.0%
2年	第1回	3	13	4	0	20	15.0%	65.0%	20.0%	0.0%
	第2回	2	3	1	0	6	33.3%	50.0%	16.7%	0.0%
3年	第1回	9	19	4	2	34	26.5%	55.9%	11.8%	5.9%
	第2回	2	11	0	1	14	14.3%	78.6%	0.0%	7.1%

設問 11.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1年	第1回	2	8	9	5	24	8.3%	33.3%	37.5%	20.8%
	第2回	0	4	7	4	15	0.0%	26.7%	46.7%	26.7%
2年	第1回	0	8	7	5	20	0.0%	40.0%	35.0%	25.0%
	第2回	0	1	4	1	6	0.0%	16.7%	66.7%	16.7%
3年	第1回	5	16	9	4	34	14.7%	47.1%	26.5%	11.8%
	第2回	2	8	4	0	14	14.3%	57.1%	28.6%	0.0%

設問 12.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1年	第1回	6	14	4	0	24	25.0%	58.3%	16.7%	0.0%
	第2回	4	9	2	0	15	26.7%	60.0%	13.3%	0.0%
2年	第1回	0	14	5	1	20	0.0%	70.0%	25.0%	5.0%
	第2回	0	6	0	0	6	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
3年	第1回	11	21	2	0	34	32.4%	61.8%	5.9%	0.0%
	第2回	4	10	0	0	14	28.6%	71.4%	0.0%	0.0%

設問 13.		回 答 数					割 合			
		4	3	2	1	回答数	4	3	2	1
1 年	第 1 回	8	11	5	0	24	33.3%	45.8%	20.8%	0.0%
	第 2 回	5	7	3	0	15	33.3%	46.7%	20.0%	0.0%
2 年	第 1 回	0	15	4	1	20	0.0%	75.0%	20.0%	5.0%
	第 2 回	1	4	1	0	6	16.7%	66.7%	16.7%	0.0%
3 年	第 1 回	6	22	4	2	34	17.6%	64.7%	11.8%	5.9%
	第 2 回	2	11	1	0	14	14.3%	78.6%	7.1%	0.0%



SC・SSWと協働し、個々の生徒のニーズに応じた適切な支援を可能にする校内体制作り  
～すべての生徒に確かな学力を保障するために～

◇調査研究の必要性

「専門性に基づくチーム体制の構築」に向けて

- ・発達障害の診断、生活保護、欠親家庭など、何らかの「困り」を持つ新入生が約半数を占める。
- ・支援が必要な生徒への対応がうまくいかない。
- ・生徒の情報が教職員やSCの間で共有できていない。
- ・SSWを組み込んでの外部機関と連携不足。
- ・SCが活用できていない。



生徒たちの「困り」を解消するための  
しっかりした支援が是が非でも必要

◇調査研究の目的

生徒一人一人の「困り」を解消するために、校内の支援体制を整え、学習環境を整えることで、確かな学力の定着や学習意欲の向上を図り、将来展望を持って卒業後の進路を模索できるようにする。

◆調査研究内容◆

- (1)具体的な支援方法の研究
- (2)支援に向けた校内体制の確立
- (3)支援を支える知識・理解の深化

学習意欲や確かな学力の定着・向上  
将来展望の意識化

生徒の「困り」 → 「困り」の解消

◆効果の検証◆

- ・生徒の意識  
～自己肯定感、学習意欲、進路意識の向上～
- ・進級率の上昇
- ・学力の向上
- ・問題行動の減少
- ・欠席日数の減少
- ・平均評定の上昇

- ・教職員の意識  
～達成感の向上や負担感の軽減～
- ・保護者の信頼感

- 《意識の検証方法》
- ・生徒アンケート
  - ・教職員アンケート
  - ・保護者アンケート

・SC週2日, SSW週1日 ⇒ SC・SSWの勤務体制の検討

- 1年目
- ・研修
  - ・情報収集・活用とアセスメント
  - ・事例の検証・蓄積
  - ・SCとSSWの連携

- 2年目
- ・「ケース会議」の運用
  - ・「支援コーディネーター」の養成・位置づけ
  - ・SST導入

- 3年目
- ・ケース会議のシステム化
  - ・外部資源を活用した支援の在り方

(1) 具体的な支援方法の研究 【未然に見つけ迅速に対応するために】

- ・効果的な情報収集方法
- ・情報の一元化・視覚化

- ・原因の抽出と分析方法
- ・原因の共有

- ・目標の明確化
- ・適切な役割分担

- ・目標に対する評価の実行
- ・評価の方法

- ・ケース会議のシステム化
- ・「ケース記録」の作成方法
- ・保護者との共有, 連携

情報収集

情報共有

アセスメント

プランニング

実行

評価

終結

- ・情報共有の方法
- ・集団守秘義務の意識の構築
- ・真の共有に向けた取り組み

- ・役割分担の明確化
- ・実行者へのサポート体制の構築
- ・外部機関との連携

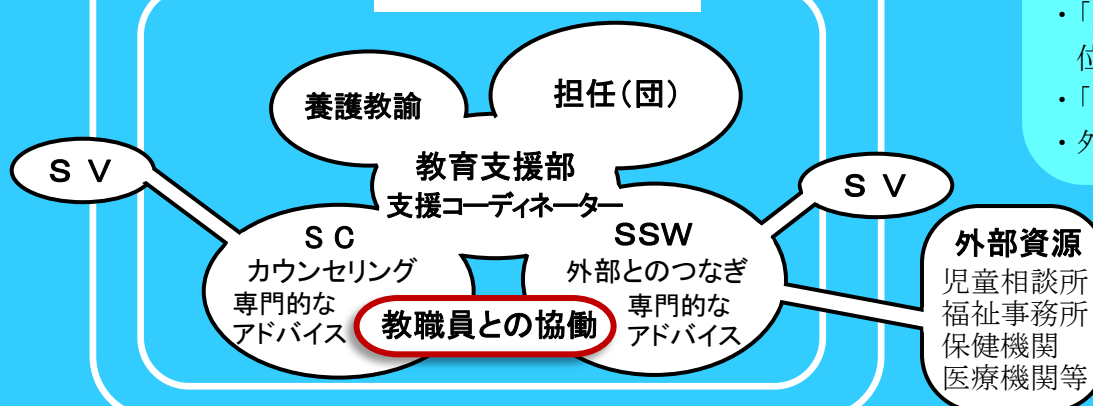
SC・SSWとの協働の在り方

(2) 支援に向けた校内体制の確立 【全教職員でケース会議を！】

☆抱え込みからの脱却☆

全教職員による共通理解会議

個別の支援会議（ケース会議）



- ・教育支援部の在り方
- ・「支援コーディネーター」の位置づけと養成
- ・「ケース会議」の定例化
- ・外部資源との連携の在り方

SC・SSWとの協働の在り方

(3) 支援を支える知識・理解の深化 【学校の一員としてのSC・SSW】

～教職員の意識の向上～

～教職員の生徒理解・指導法の向上～

- 教職員研修
  - ・SC・SSWへの理解
  - ・生徒理解
  - ・「困り」に対する認識
  - ・支援に対する考え方
  - ・専門職としての役割分担

- アンケートの活用
  - ・現状分析
  - ・研修や実践後の評価

- 事例研究
  - ・過去の事例の検証
  - ・先進事例研究
  - ・先進校視察

- 保護者との連携
  - ・SSWとの面談
  - ・SCとの面談

- 生徒全体へ働きかけ
  - ・SSWによる生徒への研修
  - ・SCとの面談
  - ・SSTの実施